中世鎌倉の都市空間構造

山村亜希

【要約】 中世鎌倉の空間構造に関する研究は、都市計画の性格をめぐって意見の相違がある。京都を模した都市計画の存在を前提として、鎌倉に平安京的都市計画案や方眼状地割案を仮定する研究もある。しかし本稿では再検討の結果、都市鎌倉の成立時に古代都城的都市計画は存在しなかったと考える。一二世紀末から一五世紀にかけての鎌倉の空間構造は、様々な構造軸が重なって変容し続けた。特に都市の成立過程を考察すると以下のことがいえる。平安末期の東西道を基軸とし、かつ「谷立地傾向」を示す空間構造は、幕府開設後も踏襲され、谷間を結ぶ街路が生じる。頼朝入府時に若宮大路が作られたが、当初は都市軸として機能していなかった。その後、幕府の移転を契機に都市軸は南北道へと転換し、谷立地傾向を残存させつつも、平野部へと居住が拡大する。若宮大路周辺の市街化に伴い生じたのが鎌倉における「町通りでない道」の「辻子」である。

史林 八〇巻二号 一九九七年三月

一 はじめに

南の一方のみが海に開き他の三方は低い山々に囲まれた、狭い平野と谷の複合した地形、その平野に北の鶴岡八幡宮から南へと一直線に若宮大路が伸び、それを中心に町が展開する。これは現代の鎌倉の姿であり、鎌倉時代の都市鎌倉の一般的なイメージでもある。つまり若宮大路を都市の中心軸とする空間像が広く支持されている。確かに若宮大路は鎌倉中期においても道路幅は三三・六メートルと推定され①、他の道路と比較できないほど大きい。また、元々存在していなかったところに新設された道②であり、これを鎌倉の都市づくり・都市計画の基軸ととらえる傾向はあると思われる。しかし本当に鎌倉・室町前期においてもこのような空間構造であり続けたのだろうか。

鎌倉に関する研究は最近の発掘調査の進行に伴い、文献史学・考古学の両分野で盛んに行われている。[3] 本稿は中世鎌倉の空間構造を論じていきたい。これに関して本稿では以下の馬淵和雄氏[4]と大三輪龍彦氏[5]の研究に着目した。両氏は都市形態の成立に論を進め、具体的な仮説を提示して京都を模した都市計画の存在を指摘している。馬淵氏は、頼朝による都市計画が存在し、それは平安京造営計画を模したものであると述べる。馬淵氏は、鎌倉時代初期に、平野の最奥部に方形の区画の鶴岡八幡宮、鶴岡八幡宮から真っ直ぐ都市の中軸線である若宮大路、八幡宮の東側には行政を司る政所、さらに東の大倉に将軍の御所である幕府が置かれると考え、「この配置が王朝国家期の平安京そのままである。」と述べる。[6] 大三輪氏は、鎌倉にも都市計画の発想としては、方眼状町割が存在したと主張する。そして方眼状町割として、具体的に中軸を若宮大路にとり、東の小町大路、西の今大路、南の大町大路、北の横大路に囲まれた間を基本的に五十丈づつ東西・南北に町を区切った形を想定している。[7]

この馬淵氏・大三輪氏の研究は、八幡宮と若宮大路を中心とした空間構造の存在と、都市計画自体の存在を前提とするものである。しかしこの二つの前提は必ずしも十分な実証を経たものとはいいがたい。まず、中世前半の空間構造に関して、石井進氏[8]は、大倉から若宮大路側への幕府の移転を契機に都市の基軸が東西道から南北道へと転換したとし、空間構造の変容を主張する。石井氏の研究は、生活する人間に焦点をあてることの多かった鎌倉研究の中で、歴史地理学的に都市をとらえ鎌倉全体の空間構造を論じた[9]という点および、八幡宮と若宮大路を中心とした空間構造は固定的なものではないと主張した点で高く評価できる。また、もう一つの前提である都市計画自体の存在に関しても、発掘の結果から、否定的な見解[10]もある。しかし、石井氏の論による都市軸の形成過程は、数十個の建造物に限られた立論であり、やや粗いスケッチにとどまっている。よって本稿では、当時の鎌倉の空間構造を時期区分して再検討したい。現在、個別・断片的に建造物の位置が推定されていることはあるが、未だそれらを統合する試みは乏しい。しかし発掘結果や文献史料からはかなりの建造物に関して位置比定が可能であり、次章ではそれらを統合し時期区分して提示することによって、より実証的に

空間構造の変容を論じたい。その結果をふまえて、第三章では前述の馬淵・大三輪両氏の都市計画に関する仮説を再検討し、また軸の形成過程を明らかにする。そこから、都市としての成立過程を論じ、鎌倉時代を中心とした空間構造を統合的に考察する。

① 『国指定史跡若宮大路遺跡調査報告書・Ⅱ』若宮大路遺跡発掘調査団一九八九。

② 『吾妻鏡』（以下『吾』と略す）養和二（一一八二）年三月十五日条。『国史大系・吾妻鏡』第一～第四　吉川弘文館一九九一。

③ 文献史学・考古学両分野の最近の研究は、以下に多く所収される。a『よみがえる中世三――武士の都鎌倉――』平凡社一九八九。b『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部一九九四。また、大三輪龍彦氏・河野真知郎氏は考古学の立場より、発掘資料から当時の生活や環境を考察する中で、都市形態に関しても様々な有効な指摘を加えている。c大三輪龍彦『中世鎌倉の発掘』有隣堂一九八三。d「消費する都市」前掲b。e河野真知郎「武家屋敷と町屋」前掲b。f『中世都市鎌倉――遺跡が語る武士の都――』講談社一九九五。

④ 「武士の都鎌倉――その成立と構想をめぐって――」『中世の風景をよむ二』新人物往来社一九九四。

⑤ a「鎌倉の町」『地方文化の日本史三――鎌倉武士西へ――』文一総合出版一九七八。b「中世都市鎌倉の地割制試論」仏教芸術一六四一九八五。c「都市鎌倉の道と地域」『中世日本の諸相』下巻　吉川弘文館一九八九。d「鎌倉の都市計画――政治都市として軍事都市として――」前掲③a。

⑥ なお、五味文彦氏も同様に、鶴岡八幡宮を下鴨神社に相応するものとし、若宮大路は防衛・防災という機能の近似により鴨川に対比できると述べている。『大系　日本の歴史五　鎌倉と京』小学館一九八八二四〇頁。

⑦ 前掲⑤d四八頁。

⑧ 石井氏の東西から南北への都市軸の転換に関する論は以下に詳しい。a「都市としての鎌倉」前掲③a。b「文献からみた中世都市鎌倉」前掲③b。

⑨ なお、松尾剛次氏は御所の位置・移転と意義を再考し、石井氏の論と結びつけて考察している。a「武家の『首都』鎌倉の成立」『都と鄙の中世史』吉川弘文館一九九二。b「中世都市鎌倉」『都市の中世』吉川弘文館一九九二。c『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館一九九三。

⑩ 手塚直樹氏は「条坊制の都市のように人工的に最初に道路と道を作って区画していくというやり方」は鎌倉ではなされず、「若宮大路を中心として、二ノ鳥居以北では条坊制などの規格を統一した町割は無かったのではないか。」と述べている。a「中世都市鎌倉の成立」前掲③b五二、五七頁。また、斎木秀雄氏も同様に「京都のような碁盤目の町づくりは全体になされていなかったようである。」と示唆する。b「溝の流れが語る地形と町割」前掲③a八七頁。

二　都市施設・機能の分布と変遷

本章では、平安末期から室町時代前半までを一般的な政治的時期区分[1]にしたがって五つに時期区分し、文献史料・発掘結果を根拠として寺社・御家人の館・幕府諸施設・道・町屋等の位置比定[2]を行う。時期は以下のように設定した。なお、比定の根拠は表1に掲げた。

第Ⅰ期　頼朝入府以前：治承四年（一一八〇）以前
第Ⅱ期　大倉幕府時代：治承四年から嘉禄元年（一二二五）まで
第Ⅲ期　宇津宮辻子・若宮大路幕府時代前期：宇津宮辻子に幕府が移転してから宝治元年（一二四七）の宝治合戦まで
第Ⅳ期　若宮大路幕府時代後期：正慶二年（一三三三）の幕府滅亡まで
第Ⅴ期　鎌倉府時代：正慶二年以降

1　第Ⅰ期　頼朝入府以前（図1）

治承四年（一一八〇）十月、頼朝は鎌倉に入り、ここを本拠と定めた。[3]『吾妻鏡』は頼朝が入府する以前の鎌倉を「所素邊鄙。而海人野叟之外。卜居之類少之。」[4]と記し、一寒村に過ぎなかった姿を描写する。しかし、昭和六〇年の今小路西遺跡での発掘から、天平当時この地に郡衙が存在していたことが確実視されている。また『吾妻鏡』には、源頼義が前九年の役の戦勝記念に由比ヶ浜に石清水八幡宮を勧請した[5]との記述がある。頼朝が鎌倉に幕府をおいた理由にも、地形的に自然の「要害」[6]であったことのほか、「御曩跡」[7]即ち先祖ゆかりの地であったことが挙げられている。以上を考え合わせると、少なくとも武家の棟梁の居住地であり、全くの一寒村であったとは言い難い。

そこで、図1よりこの時期の鎌倉の形態を考察し直してみたい。まず、北の山側には、滑川上流の作る谷に沿って、杉

表1　寺社・御家人邸の時期と位置の比定と根拠

第Ⅰ期

神社

No.	名　　称	存在が確認される時期とその根拠／位置比定の根拠
1	荏柄天神社	社伝：創建は長治元(1104) 年／現存
2	八雲神社	伝承：鎌倉祇園会は栄保年中(1081—84) に始まる／現存
3	元八幡	吾：治承4(1180) 10・12　康平6(1063) 8月に頼義勧請／現存
4	御霊神社	鎌：鎌倉平氏の祖神／現存
5	甘縄神明社	『相州鎌倉郡御興山甘縄寺神明宮縁起略』：和銅3(710) 年行基開山／現存
6	佐助稲荷	社伝：頼朝入府以前より存在／現存

寺院

1	杉本寺(椙本観音堂)	伝承：開基行基，吾：文治5(1189) 11・23に初見／現存
2	窟堂○	吾：文治4(1188) 10・1に初見／現存，「いわやたう」の木簡
3	亀谷堂	吾：治承4(1180) 10・7に初見／同左：義朝の旧跡

御家人の邸宅

1	梶原景時(別)	鎌，伝承：後三年の役より梶原氏が居住／地名，伝承，鎌：梶原屋敷跡
2	杉本義宗・和田義盛	『源平盛衰記』巻二十一「小坪坂合戦事」：治承4(1180) 年以前に存在／同左，伝承：杉本城跡
3	佐竹義光・秀義	風，伝承：義光（源義家の弟）以来佐竹一族が居住／風：佐竹屋鋪，『大宝寺境内図』：名越佐竹屋鋪
4	梶原景時	鎌，伝承：後三年の役より梶原氏が居住／地名，伝承，鎌：梶原屋敷
5	源義朝	吾：治承4(1180) 10・7／吾：亀谷御旧跡
6	兼道	吾：治承4(1180) 10・9～建暦3(1215) 5・8／吾：山内

第Ⅱ期

神社

1	八坂大神	『天王社御造営御興再建控』：相馬師常(1139—1205)の勧請／現存
2	鶴岡八幡宮○	吾：治承4(1180) 10・12　小林郷に八幡宮を遷す／現存
3	青梅聖天社	鎌：鎌倉時代には存在／現存

寺院

1	大慈寺○	吾：建保2(1214) 7・27　供養／吾：正嘉元(1257) 8・18〔西御門から辰戌の方角〕，小字地名：丈六（丈六堂か）
2	極楽寺(浄明寺)	『稲荷山浄妙禅寺略記』：文治4(1188) 年　創建／現存
3	日光山	社：文治2(1186) 9・30に初見／吾：寛元3(1245) 3・16　犬懸谷
4	永福寺○	吾：文治元(1185) 12・9　事始め／吾：文治5(1189) 12・9等　二階堂，正嘉元(1257) 8・18〔西御門から卯酉の方角〕
5	大倉薬師堂(覚園寺)	吾：建保6(1218) 9・9　建立／『覚園寺文書』：永仁4(1246) 年覚園寺に改名し現存
6	勝長寿院○	吾：文治元(1185) 2・19　事始め／吾：元暦元(1184) 11・26〔御所

		の東南〕，谷地名：大御堂谷
7	北条義時の法華堂	吾：元仁元(1224) 8・8　供養／吾：元仁元(1224) 6・18〔法華堂の東の山上〕
8	法華堂○	吾：建久 6 (1195) 10・21　事始め／吾：嘉禄元(1225) 10・20〔西に岡〕，4・9〔御所の北北東〕
9	鶴岡二十五坊○	供：建久年間(1190—1199)に成立？／供：北谷・南谷・東谷・西谷
10	東光寺	攪：承元 3 (1209) 10・10　供養／攪：永福寺傍
11	補陀落寺	『補陀洛文書』「文龍書状」：〔頼朝開基か？〕／現存
12	成就院	風：承元元(1207) 11・21　泰時創建／現存
13	日吉別宮	吾：建保 3 (1215) 4・2に初見／同左：〔甘縄神宮近く〕
14	最宝寺(1195年以降)	風：建久 6 (1195) 年に移転してくる／『関東管領上杉朝宗奉書』：享徳元(1452) 11・9弁ヶ谷高御蔵
15	寿福寺	吾：正治 2 (1200) 7・15　十六羅漢図の開眼供養／現存
16	岩船地蔵尊	伝承：頼朝の娘大姫の守本尊／現存
17	最宝寺(1195年以前)	風：頼朝の創建／風：扇ヶ谷
18	最光寺	風：日光(～1212) 再建／風：松葉ヶ谷

御家人の邸宅

1	平広常	吾：治承 4 (1180) 9・3～12・12／風：十二所に墓塔・屋敷址
2	大江広元	広元の在年(1148～1225)／伝承：十二所明石橋付近に居住
3	毛利季光	季光の在年(1202～47)／伝承：浄明寺足利公方居館跡に邸
4	二階堂氏	吾：建久 3 (1192) 9・24～弘長 3 (1263) 4・23／吾：二階堂
5	比企能員(宿)	吾：文治元(1185)9・1／吾：東の御門の宅
6	和田胤長	吾：建暦 3 (1213)3・25～4・2／吾：荏柄前
7	北条政子	吾：建保元(1213)5・4～8・1／吾：東御所〔幕府の郭外〕
8	一条実雅	吾：承久元(1219)10・20／吾：大倉，義時邸の傍
9	大野右近入道	吾：承久 2 (1220)9・25／吾：大倉，義時邸近辺か
10	工藤八郎左衛門尉	吾：承久 2 (1220)9・25／吾：大倉，義時邸近辺か
11	源仲章(宿)	吾：建保 5 (1217)1・11／吾：大倉御所近隣
12	八田朝重(宿)	吾：建保 5 (1217)1・11／吾：大倉御所近隣
13	北条時房(宿)	吾：建保元(1213)12・1／大倉御所近隣
14	筑後守(宿)	吾：建保元(1213)12・1／吾：大倉御所近隣
15	北条義時・政子・藤原頼経	吾：正治 2 (1200) 5・25～嘉禄元(1225) 7・23／吾：大倉亭，〔大倉観音堂の西辺〕
16	北条政子	吾：貞応 2 (1223)2・27～嘉禄元(1225)5・3／吾：御堂御所
17	二階堂行村	吾：建保 5 (1217)3・10～貞応 3 (1224)2・5／吾：勝長寿院の北方
18	八田知家(宿)	吾：文治 2 (1186) 5・14～建保元(1213) 12・1／吾：南御門，〔御所近辺〕
19	畠山重忠	吾：正治元(1199)5・7／吾：〔御所近辺〕，伝承：南御門遺跡
20	小山朝政(宿)	朝政の在年(1155～1238)／『小山文書』：法華堂
21	藤原安平	吾：文治 2 (1186)1・5／吾：西御門
22	三浦義村・泰村・家村	吾：建久10(1199)10・27～宝治元(1247)6・15／吾：西御門
23	北条義時・泰時	吾：承久 3 (1221)11・3／吾：奥州当時館
24	大江広元(宿)	吾：文治 3 (1187)4・14～承久 2 (1220)5・20／吾：政所，大倉御所近辺

25	北条義時	吾：建保元(1213)5・2～承久元(1219)1・27／吾：小町上
26	村上基国	吾：建久2(1191)3・4／吾：小町大路失火焼亡
27	佐々木成綱	吾：建久2(1191)3・4／吾：小町大路失火焼亡
28	佐貫広綱	吾：建久2(1191)3・4／吾：小町大路失火焼亡
29	大内惟義・惟信・義信	吾：建久2(1191)3・4～承久2(1220)10・11／吾：小町大路失火焼亡，町の辺
30	工藤行光	吾：建久2(1191)3・4～正治2(1200)10・21／吾：小町大路失火焼亡，若宮大路
31	新田忠常	吾：文治3(1187)1・18～建仁2(1202)9・29／吾：小町大路失火焼亡，小町大路の辺
32	葛西清重	吾：治承4(1180)11・10／伝承，地名：葛西ヶ谷
33	尾藤景綱・景氏	吾：貞応3(1224)6・27～嘉禎2(1236)12・19／吾：北条泰時邸南門東脇，政所前失火焼亡
34	北条泰時・時頼	吾：承元4(1210)11・20～康元元(1256)11・22／吾：鎌倉亭，正家，小町の西北，小町御亭，御所の北方(新造亭)
35	和田義盛○	吾：建久6(1195)10・27～建暦3(1213)5・2／吾：若宮大路西頬
36	大庭景親・親能	吾：文治4(1188)11・18～建仁元(1201)3・10／吾：若宮大路西頬
37	土屋義清	吾：建仁元(1201)3・10／吾：若宮大路西頬
38	関実忠	吾：貞応3(1224)6・27／吾：泰時邸近辺
38	八田朝重	吾：建保4(1216)6・8～嘉禎2(1236)11・24／吾：町大路失火，南北十四町災
40	比企能員	吾：文治6(1190)1・3～建久2(1191)3・8／吾：小町大路失火焼亡，伝承，地名：比企谷
41	北条時政・義時（別邸）	吾：建仁3(1203)9・2～建永元(1206)2・4／吾：名越亭，伝承：名越谷
42	三善康信・康持	吾：正治元(1199)4・1～延応元(1239)12・21／吾：名越，大町大路東
43	中条家長	吾：承元4(1210)2・1～寛喜3(1231)1・16／吾：米町辺失火　横町南北六町余焼亡，若宮大路
44	加藤景廉	吾：寿永元(1182)6・8／吾：車大路
45	小山朝政・長村	吾：治承5(1181)閏2・23～文応元(1260)11・22／吾：車大路，若宮大路
46	安達景盛(宿)	吾：建保3(1215)1・11／吾：若宮辻
47	相模次郎入道行念	吾：承久2(1220)10・11／吾：町の辺
48	工藤佑経	吾：建久4(1193)1・5～4・19／伝承：材木座実相寺
49	常陸平四郎	吾：建久3(1192)5・19／吾：由井
50	藤原広綱	吾：寿永元(1182)11・10／吾：飯島
51	牧宗近	吾：建久3(1192)10・30／吾：浜の家
52	橘公忠	吾：建久4(1193)8・18／吾：浜の宿館
53	平盛時	吾：正治元(1199)5・22／吾：浜の辺
54	飯富源太	吾：正治元(1199)5・22／吾：浜の辺
55	中沢兵衛尉	吾：正治元(1199)5・22／吾：浜の辺
56	長時江七景遠	吾：文治2(1186)2・26／吾：浜
57	源範頼(宿館)	吾：建久4(1193)8・18／吾：浜
58	小坂太郎	吾：正治2(1200)9・2／吾：小坪
59	中原光家	吾：寿永元(1182)6・1～12・10／吾：小窪，小坪

60	藤原清近(清親)・清時	吾：承久3(1221)5・21～仁治2(1241)3・17／吾：稲瀬川
61	宮城家業	吾：正治2(1200)8・21／吾：甘縄
62	千葉成胤・時胤・胤綱	吾：建暦3(1213)2・15～仁治2(1241)3・17／吾：甘縄，安達邸の南，甘縄山麓以南三町余焼亡
63	安達氏○	吾：治承4(1180)12・20～弘長元(1261)4・23／吾：甘縄，甘縄の山麓，若宮辻より甘縄の間
64	橘隆邦	吾：承久2(1220)1・29／吾：〔窟堂の辺〕
65	工藤右衛門尉	吾：承久2(1220)1・29／吾：〔窟堂の辺〕
66	佐野基綱	吾：文治4(1188)1・1／吾：窟堂下
67	岡崎義実・土屋義清	吾：治承4(1180)10・7～正治2(1200)閏2・12／吾：亀谷，寿福寺傍
68	中原親能	吾：正治元(1199)5・7～建暦3(1213)6・8／吾：亀谷

第Ⅲ期

寺院

1	月輪寺	『若狭国志』五：北条経時の時には存在／鎌：霧沢ノ内好見
2	五大堂	吾：嘉禎元(1235)6・29　供養／現存：明王院
3	釈迦堂○	吾：嘉禄元(1225)6・13　供養／吾：元仁元(1224)12・17〔泰時邸の東方〕，谷地名：釈迦堂ヶ谷
4	大門寺	『金沢文庫古文書』十二：仁治3(1242)8・1に初見／風：字大門
5	東勝寺○	『本朝高僧伝』：開基泰時，『東山文庫記録』：永正9(1512)5・20頃まで存在／発掘による
6	辻の薬師堂	安置してある十二神像は鎌倉時代作／現存
7	実相寺	寺伝：開山日昭(1236～1323)／現存
8	最福寺	風：寛喜2(1230)年創建／風：鎌倉弁ヶ谷
9	光明寺	『鎌倉佐介浄刹光明寺開山御伝』：寛元元(1243)5・3　供養／現存
10	新善光寺	『北条九代記』：仁治3(1242)6・15に初見／風：名越(松ヶ谷長勝寺裏)
11	北条経時の墳墓堂	吾：宝治元(1247)3・20　供養／吾：寛元4(1246)4・2佐々目山麓
12	悟真寺(蓮華寺)	『鎌倉佐介浄刹光明寺開山御伝』：寛元元(1243)5・3　供養／同左：佐介ヶ谷，伝承：蓮華寺跡，地名：光明寺畠
13	新福寺	『元亨釈書』：開山大休正念(1215—89)／『文明明応年間関東禅林詩文等抄録』：石切山
14	山王堂	吾：寛元3(1245)3・19に初見／同左：亀谷山王宝前，鎌：源氏山の西北

御家人の邸宅

1	北条泰時(別)	吾：仁治2(1241)12・30／吾：山内巨福礼別館
2	唐橋通時	吾：寛喜3(1231)1・14／吾：大倉観音堂西辺，二階堂大路
3	下山入道	吾：寛喜3(1231)1・14／吾：大倉観音堂西辺，二階堂大路
4	丹波良基	吾：延応元(1239)11・20～12・13／吾：大倉薬師堂
5	施薬院使良基	吾：延応元(1239)11・20／吾：薬師堂ヶ谷
6	藤原親実	吾：文暦2(1235)1・20～暦仁2(1239)12・29／吾：大倉
7	藤原実雅	吾：貞応7(1222)7・3～貞応2(1228)9・16／吾：大倉
8	伊賀朝行	吾：嘉禄元(1225)10・28／吾：大御堂前

9	北条実時	吾：寛元5(1247)1・13／吾：頼朝法華堂前失火焼亡
10	後藤基綱	吾：寛喜元(1229)3・26～9・5／吾：大倉，西御門
11	足利義氏(宿)	吾：寛喜3(1231)2・11～建長6(1254)11・16／吾：若宮馬場本，大倉
12	清原秀氏	吾：嘉禄2(1226)12・13／吾：政所前失火焼亡
13	清右衛門丞	吾：嘉禄2(1226)12・13／吾：政所前失火焼亡
14	大和左衛門尉	吾：嘉禄2(1226)12・13／吾：政所前失火焼亡
15	平盛綱(宿)	吾：嘉禄2(1226)12・13／吾：政所前失火焼亡
16	近藤刑部丞	吾：嘉禄2(1226)12・13／吾：政所前失火焼亡
17	万年右馬允	吾：嘉禎2(1236)12・19／吾：泰時邸北土門東脇
18	安東光成	吾：嘉禎2(1236)12・19／吾：泰時邸北土門西脇
19	南条時貞	吾：嘉禎2(1236)12・19／吾：泰時邸北土門西脇
20	諏訪盛重	吾：嘉禎2(1236)12・19～寛元4(1246)6・6／吾：泰時邸南角，風：宝戒寺前
21	平盛綱	吾：嘉禎2(1236)12・19～12・23／吾：泰時邸南門西脇，小町
22	大田次郎	吾：嘉禎2(1236)12・19／吾：泰時邸南門西脇の西
23	北条経時・重時（赤橋家）	吾：寛元2(1244)12・26～宝治元(1247)7・17／吾：泰時邸北隣，泰時邸に向顔，御所北面，若宮大路
24	北条時房○	吾：嘉禄2(1226)12・21～延応元(1239)4・25／吾：泰時邸近辺
25	毛利季光(宿)	吾：嘉禄元(1225)4・30～寛元5(1247)1・3／吾：御所の向い
26	藤原定員○	吾：貞永元(1232)6・7／吾：小町の口
27	北条朝直・時章(宿)	吾：寛元3(1245)5・23～弘長3(1263)11・22／吾：御所巽方
28	長沼宗政	吾：寛喜2(1230)1・3／吾：御所の南
29	大江泰秀	吾：仁治2(1241)3・15～宝治元(1247)6・5／吾：西阿近隣〔御所近辺か〕
30	中民部太郎	吾：嘉禎2(1236)11・24／吾：町大路失火，南北十四町災
31	竹御所	吾：嘉禎2(1226)10・18～天福元(1233)12・28／伝承：妙本寺
32	町野康俊・康持(宿)	吾：寛喜3(1231)1・25／吾：名越
33	北条時幸	吾：寛喜3(1231)1・25／吾：名越
34	北条朝時・時章等(名越氏)	吾：安貞2(1228)12・12～弘長3(1263)12・28／吾：名越，新善行寺辺，御所の南
35	阿野四郎	吾：承久元(1219)9・22／吾：浜の家，若宮大路より東
36	相良明定	『相良家文書』：嘉禎3(1237)10・4／同左：浜
37	相良明定・明胤	『相良家文書』：嘉禎3(1237)10・4／同左：甘縄
38	葛西清親	吾：仁治2(1242)3・17／吾：前浜より甘縄の間
39	北条時盛	吾：寛元4(1246)6・27～文永3(1266)7・4／吾：佐介
40	諏訪盛重○	盛重は義時・泰時・時頼に仕える／鎌：千葉屋敷東南ノ島，小字：蔵屋敷，伝承：諏訪屋敷
41	千葉常胤・胤貞(別)	胤貞の在年(1288～1336)／風：小町妙隆寺の北方
42	武田信光・信忠	吾：延応元(1239)12・13／吾：薬師堂より坤の方角，名越
43	佐々木義清	吾：延応元(1239)12・29／吾：武蔵大路下
44	足利大夫判官	吾：仁治4(1243)1・9／吾：亀ヶ谷
45	隠岐次郎左衛門尉泰清	吾：仁治2(1242)10・22／吾：亀谷辺
46	加地八郎左衛門尉信頼	吾：仁治2(1242)10・22／吾：亀谷辺

47	長井時秀・泰秀	吾：仁治2(1242)3・15～弘長3(1263)12・17／吾：御所と永福寺の間，荏柄社の前から塔辻の間
48	北条実時・時宗	吾：宝治元(1247)1・13～文応元(1264)3・21／吾：東亭，東御亭，法華堂前

第Ⅳ期

神社

1	大倉稲荷	吾：弘長元(1261)5・1に初見／『寺伝略記』：〔浄明寺境内か〕

寺院

1	光触寺	寺伝：開山一遍智真(～1285)／現存
2	一心院	『社務職次第』：元弘3(1333)9・4に初見／鎌：光触寺の南方の柏原山下
3	法源寺	『延宝伝燈記』：文永7(1270)年に初見／『麓山略志』：胡桃ヶ谷
4	大楽寺	『神奈川県浅間神社の元大楽寺の鐘銘』：文保元(1317)年創建，明治維新で廃寺に？／鎌：浄妙寺ノ東ノ谷，『鎌倉大日記』：永享元(1429)・2・11〔永安寺の山向こう〕
5	延福寺	風：嘉元3(1305)年頃創建か？／伝承：浄妙寺の西北隣
6	瑞泉寺	寺伝：嘉暦2(1327)年創建／現存
7	理智光寺	『律苑僧宝伝』「泉涌寺宗燈律師伝」：開山願行(～1259)／明治2年まで存在
8	勝福寺	『宝金剛寺所蔵木造不動明王像胎内納入物大毘盧那成経第十七巻の奥書』：永仁2(1294)年に初見／同左：二階堂榻谷
9	護法寺	『延宝伝燈録』：無学祖元の頃には存在／風：荏柄天神社の傍
10	太平寺○	『念大休禅師語録』：弘安5(1282)年に初見／寛永19(1642)年より高松寺に改名し昭和6年まで存在
11	来迎寺	寺伝：開山一遍智真／現存
12	宝戒寺	『足利尊氏の寺領相模国金目郷半分の寄進状案』：〔開基後醍醐天皇〕／現存
13	常在寺	風：文保2(1318)3・27頃存在／風：小町，常在寺屋敷の地名を残す
14	妙本寺	寺伝：文応元(1260)年草創／現存
15	別願寺(能成寺)	寺伝：弘文5(1282)年に能成寺から改名／現存
16	善導寺	『金沢文庫古文書』十：弘安10(1287)年に初見／『安養院寺伝』：現安養院の地
17	安養院	寺伝：鎌倉末期に稲瀬川の辺から移転してくる／現存
18	田代観音堂	『北条九代記』：延慶3(1310)11・6に初見／鎌：妙本寺の東南
19	長福寺	『円覚寺文書足利尊氏御教書』：弘安7(1284)年には存在／同左：名越
20	慈恩寺	『北条貞時十三回忌供養記』：元亨3(1323)年に初見／『鹿山略志』：海浜に近い
21	本国寺	『元祖化導記』，『日蓮上人註画讃』：建長5(1253)年　創建／同左：松葉ヶ谷
22	安国論寺	寺伝：開山日蓮(1260年頃)／現存
23	妙長寺	寺伝：正中2(1325)年　千葉胤貞開基／現存
24	善勝寺	『金沢文庫古文書』十二：徳治2(1307)3・29に初見／同左：名越
25	経師坊谷	『金沢文庫古文書』十：弘長4(1264)年に初見／同左：経師谷

26	崇寿寺	『崇寿寺鐘銘』：元亨元(1321)年　開創／『崇寿寺鐘銘』：飯島の長，鎌倉の巽，弁谷霊区
27	前浜一向堂（新居閻魔堂）	『円応寺寺伝』：建長2(1250)年　創設／『成氏年中行事』：浜，『荒居閻魔堂円応寺修造勧進状』：由比郷見越岩，〔海に面す〕，鎌：由比浜大鳥居の東南
28	霊山寺	『和田文書』「三木俊連軍忠状」：元弘3(1333)5・20に初見／同左：稲村ヶ崎
29	極楽寺	『元亨釈書』：正元元(1259)年北条重時　創建／現存
30	長谷寺	『相州鎌倉海光山長谷寺事実』：正治2(1200)年　創建／現存
31	光則寺	寺伝：文永8(1271)9月　創建／現存
32	悲田	〔極楽寺創建後か？〕／『西大寺叡尊伝記集成』「関東往還記」5・1条：浜
33	高徳院	吾：大仏は建長4(1252)年頃完成／現存
34	甘縄宿坊	『随聞私記』：永仁5(1297)閏10・7に初見／同左：甘縄，佐々目ヶ谷口
35	万寿寺○	『鹿山略記』：弘安9(1286)年創建／『鹿山略記』：長谷郷
36	長楽寺	吾：文応元(1260)4・29に初見／鎌，風：笹目ヶ谷の辺，『律苑僧宝伝』：稲瀬川の畔
37	西方寺	『浄光明寺住持高恵等連署発願文写』：正和4(1315)年に初見／『極楽寺伽藍古図』
38	七観音	吾：建長2(1250)12・20に初見／小字：七観音谷
39	遣身院	『金沢文庫古文書』八：弘安8(1285)7・28に初見／同左：佐々目
40	新清涼寺○	『忍性菩薩行状略記』：弘長元(1260)年に初見／鎌：宝泉寺ヶ谷の北，海蔵寺外門前の東
41	松谷寺	『金沢文庫古文書』十：嘉元2(1304)年に初見／風：佐介谷の小字松枝谷
42	薬師堂	吾：正嘉2(1258)1・17に初見／鎌：佐介ヶ谷の入口の東南
43	法性寺○	出土した宝塔の銘：嘉暦2(1327)年に初見／『扇ヶ谷絵図』，風：法連寺谷
44	無量寺	吾：文永2(1265)6・3に初見／鎌：興禅寺の西の方の谷
45	松源寺	吾：弘長3(1263)4・7の地蔵堂が前身か？／鎌，『扇ヶ谷村絵図』：鉄観音ノ西，厳窟堂ノ山ノ中壇
46	新清水寺	吾：正嘉2(1258)1・17に初見／風：清水寺谷(浄光明寺前なり)
47	東林寺	鎌：浄光明寺と同時期に創建か？／鎌：浄光明寺の向かい
48	浄光明寺	寺伝：建長3(1251)年創建／現存
49	多宝寺○	『忍性菩薩行状略頌』：弘長2(1262)年に初見／鎌：多宝寺谷
50	正円寺	『随聞私記』：永仁4(1296)4・16に初見／風：天神社，同左：〔扇ヶ谷〕
51	北斗堂	吾：弘長3(1263)8・25に初見／風：佐介谷〔扇ヶ谷〕の小字，『扇ヶ谷村絵図』
52	建長寺	吾：建長5(1253)11・25供養／現存
53	浄智寺	鎌，風：〔弘安4(1281)年頃創建か〕／現存
54	禅興寺(最明寺)	『延宝伝燈録』：時宗開基，〔文永5(1268)年頃創建か〕／明治初期まで存在，『明月院古絵図』
55	東慶寺	『五山記考異』『鎌倉五山記』：〔弘安8(1285)年頃創建〕／現存
56	円覚寺	『建長寺年代記』他：弘安5(1282)12・8　供養／現存

御家人の邸宅

1	長井頼秀・貞頼	『毛利家文書』：元徳元(1329)1・222／同左：宅間ヶ谷
2	相良頼俊	『相良家文書』：正応3(1290)5・8／同左：釈迦堂ヶ谷
3	丹後行貞	『北条九代記』：正応3(1289)1・3／同左：〔二階堂か〕
4	足利上総前司	『平安京京図』：元応元(1319)8・3／同左：大蔵稲荷下
5	佐々木泰綱山荘	吾：正嘉元(1257)8・18～9・30／吾：薬師堂ヶ谷
6	北条教時	吾：文永3(1266)7・4／吾：薬師堂ヶ谷
7	宇佐美祐泰	吾：建長3(1251)10・7／吾：荏柄天神社前
8	伊賀時家	吾：康元元(1256)3・16／吾：大倉
9	小田時家	吾：康元元(1256)3・16／吾：大倉
10	宮内時秀	吾：弘長3(1263)10・17／吾：荏柄社の前から塔辻の間
11	北条政村	吾：文永2(1265)7・16～文永3(1266)1・29／吾：小町
12	伊賀光宗	吾：正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間
13	後藤基政	吾：正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間
14	宇都宮泰綱	吾：正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間
15	伊豆実保	吾：正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間
16	北条業時	吾：正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間
17	文元	吾：正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間
18	結城朝広	吾：建長3(1251)1・4／吾：塔辻
19	北条教時(宿)	吾：文永3(1266)7・4／吾：塔辻
20	天野景村(宿)	『関東往還記』：弘長2(1262)2・27／同左：西御門
21	北条時宗～高時（北条執権邸）	吾：文応元(1264)3・21～『太平記』：元弘3(1333)5・22／吾：御所の東北，伝承：宝戒寺地
22	大曾祢長泰(宿)	吾：弘長元(1261)7・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
23	安達泰盛(宿)	吾：弘長元(1261)7・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
24	二階堂氏(宿)	吾：弘長元(1261)7・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
25	筑前入道	吾：弘長元(1261)1・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
26	新田三河前守	吾：弘長元(1261)1・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
27	木工権頭	吾：弘長元(1261)1・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
28	図書頭	吾：弘長元(1261)1・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
29	薩摩七郎左衛門尉	吾：弘長元(1261)1・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
30	周防五郎左衛門尉	吾：弘長元(1261)1・13／吾：宇津宮辻子御所近辺
31	前宮内少輔元遠（休所）	『北条九代記』：元徳2(1330)2・7／吾：宇津宮辻子御所近辺
32	安東光成	吾：建長6(1254)2・4／吾：藤原親家(宿)・北条時定邸の近く
33	藤原親家(宿)	吾：建長6(1254)2・4～正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間，安東光成・北条時定邸の近く
34	北条時定	吾：建長3(1251)2・10～建長6(1254)2・4／吾：安東光成・藤原親家(宿)邸の近く，若宮大路―由比浜―佐々目谷―中下馬橋の間
35	武藤景頼(宿？)	吾：弘長3(1263)12・10／吾：咒師勾当辻子と大学辻子の間，若宮大路
36	花山院通雅(長雅)	吾：正嘉元(1257)11・22／吾：若宮大路と田楽辻子の間，若宮大路
37	中条家長(宿)	『北条九代記』：弘安3(1280)10・28／同左：中の下馬橋
38	北条時村(宿)	『北条九代記』：永仁元(1293)3・23／同左：若宮大路
39	安東聖秀	『太平記』：元弘3(1333)／同左：小町口
40	藤原行教・貞行	『田代文書』：元亨2(1322)2・29／同左：比企谷

41	多治見国長(宿)	『藤島神社文書』：正中元(1324)9・26／同左：唐笠辻子
42	小早川茂平・政景	『小早川家文書』：正嘉2(1258)7・19／同左：米町
43	田代信綱	信綱の在年(1310年頃)／鎌：妙本寺の南方，田代観音堂の西方
44	備前三郎長頼	吾：正嘉2(1258)5・8／吾：名越
45	長井頼秀・貞頼	『毛利家文書』：元徳元(1329)12・22／同左：小坪
46	長門景遠	吾：文治2(1265)2・26／吾：浜の家
47	阿仏尼(宿)	阿仏尼の在年(～1283)／『十六夜日記』：月影ヶ谷
48	北条時定	吾：建長3(1251)2・10／吾：甘縄
49	北条時隆	吾：建長3(1251)2・10／吾：甘縄
50	地相法橋	吾：建長3(1251)2・10／吾：甘縄
51	山内通資・通時	『山内首藤家文書』：元徳2(1330)3・18／同左：甘縄
52	平為度・宗度	『朽木文書』：延慶2(1309)12・1／同左：甘縄
53	平宗度・顕盛	『朽木文書』：嘉暦3(1328)6・11／同左：甘縄魚町
54	宿屋光則	光則は時頼の家臣，〔文永8(1271)年以後〕／伝承：光則寺
55	大仏貞直	貞直の在年(～1333)／『太平記』：大仏の地
56	北条政村・時村(別)○	吾：康元元(1256)8・20～『建治三年日記』：建治3(1277)12・13／吾：常盤
57	北条重時(別)	吾：弘長元(1261)4・21～4・25／吾：極楽寺
58	平宗度・頼盛	『朽木文書』：元亨2(1322)2・26／同左：佐々目
59	安達泰盛(別)	『建治三年日記』：建治3(1277)6・13／同左：佐介
60	北条時頼(別)	吾：建長6(1254)・6・15～弘長元(1261)11・22／吾：山内御亭，最明寺御亭
61	諏訪刑部左衛門入道	吾：正嘉2(1258)8・17／吾：山内
62	伊具四郎	吾：正嘉2(1258)8・16／吾：山内
63	民部入道(宿)	『北条九代記』：徳治元(1306)7・19／同左：山内
64	平頼綱	『建治三年日記』：建治3(127)712・27／同左：山内

第V期

神社

1	南小路聖天社	『法華堂文書』「一色頼行寺領寄進状」：建武元(1334)8・3に初見／同左：大蔵，〔筋替橋～岐道あたりか〕
2	白旗明神社	『空華日光集』：応安6(1373)11・15に落成／『宝戒寺文書』：貞和4(1348)11・1　白幡谷口

寺院

1	泰安寺○	『鎌倉九代後期』：応永31(1424)11・11に初見／風：飯盛山の山上
2	大休寺	『浄妙寺略記』：〔貞治5(1366)年頃までに創建か〕／同左：浄妙寺の傍，延福寺旧跡の西
3	報国寺	鎌，『本朝高僧伝』，攬，風：開基は足利家時／現存
4	永安寺	『黄梅院文書』「黄梅院造営規式」：応永9(1402)年に初見／『鎌倉九代後期』：永享元(1429)2〔大楽寺の近く〕
5	報恩寺	『空華集』「報恩寺鐘銘」，『空華日工集』：応安4(1371)10・15　創建／『鹿山略志』：〔東隣に法華堂〕
6	保寿院	『空華日工集』：応安元(1368)9・29頃　創建／風：西御門
7	八正寺	風，吾，社務職次第，社：応永21(1414)4・13鶴岡二十五坊の別当坊が八正寺と称する／風：西谷

8	本覚寺	『石渡新造左衛門之碑銘』：永享8（1436）年　創建／現存
9	多福寺	風：応永6（1399）年　創建／風：大宝寺の場所
10	木東寺	『黄梅院文書』「古教妙訓証文」：文安3（1446）年に瓜ヶ谷に移転／同左：名越花ヶ谷
11	妙法寺	寺伝：延文2（1357）年　日叡の再興／現存
12	安穏寺	風：応永4（1348）年以前に創建／風：松葉ヶ谷
13	本興寺	寺伝：開山日什（～1393）／現存
14	長勝寺	『由緒書』：貞和元（1345）年　創建／現存
15	九品寺	寺伝：開基新田義貞／現存
16	国清寺	『鎌倉五山記』：康安年間（1361—62）　開基畠山国清／『喜連川判鑑』，『鎌倉大草紙』：佐介ヶ谷
17	天狗堂	『太平記』：正慶2（1333）5月に初見／鎌，風：長谷小路から佐介谷へ入る右手の山の端
18	法泉寺	『延宝伝燈録』：開基畠山国清〔延文5（1360）年以前か〕／地名：法泉寺ヶ谷
19	勝因寺	『本朝高僧伝』：〔貞治（1362—68）年間には存在）／風：坂中正因寺，『扇ヶ谷村絵図』：正遠寺，地名：勝縁寺ヶ谷
20	海蔵寺	『海蔵寺修造勧進状写』：応永元（1394）年　建立／現存
21	霊厳院	『上杉系図』扇谷顕定の項：永和6（1380）4・3に初見／鎌：華光院前の畠

御家人の邸宅

1	鎌倉御所	『喜連川判鑑』応永15（1408）8・27　立柱上棟／風，覧，鎌，『喜連川判鑑』，伝承：浄妙寺の東，公方屋敷
2	足利直義	『梅松論』：直義元弘3（1333）12鎌倉へ下向／『浄妙寺略記』：大休寺の地
3	宅間上杉氏	『空華集』：永和4（1378）4・17／伝承，同左：宅間ヶ谷
4	犬懸上杉氏	犬懸上杉氏は応永24（1417）年まで存続／伝承：犬懸ヶ谷
5	足利義詮（臨時の御所）	『社務職次第』：建武2（1335）8・27／同左：二階堂御所
6	足利義詮（臨時の御所）	『梅松論』：元弘3（1333）5／同左：大倉幕府跡
7	足利尊氏	尊氏の在年（1305～58）／『鎌倉絵図』：スミウリ川
8	山内上杉氏	山内上杉氏は永禄元（1558）年まで存続／『湘山星移集』：佐介
9	足利尊氏	尊氏の在年（1305～58）／『鎌倉絵図』：山ノ内
10	扇ヶ谷上杉氏	扇ヶ谷上杉氏は天文14（1546）まで存続／伝承：扇ヶ谷英勝寺付近
11	大友氏時	『大友文書』：貞治3（1364）2／同左：扇ヶ谷の藤ヶ谷
12	山内上杉氏	『湘山星移集』：康暦元（1379）4・20（30）／伝承，同左：明月院入口付近の東方

吾：吾妻鏡，鎌：新編鎌倉志，覧：鎌倉覧勝考，風：新編相模国風土記稿，社：鶴岡社務記録，供：鶴岡八幡宮寺供僧次第，社務職次第：鶴岡八幡宮寺社務職次第，宿：宿所，別：別業の略。〔　〕は文献の内容から推定。発掘結果のあるものには名称の欄に○印を付した。

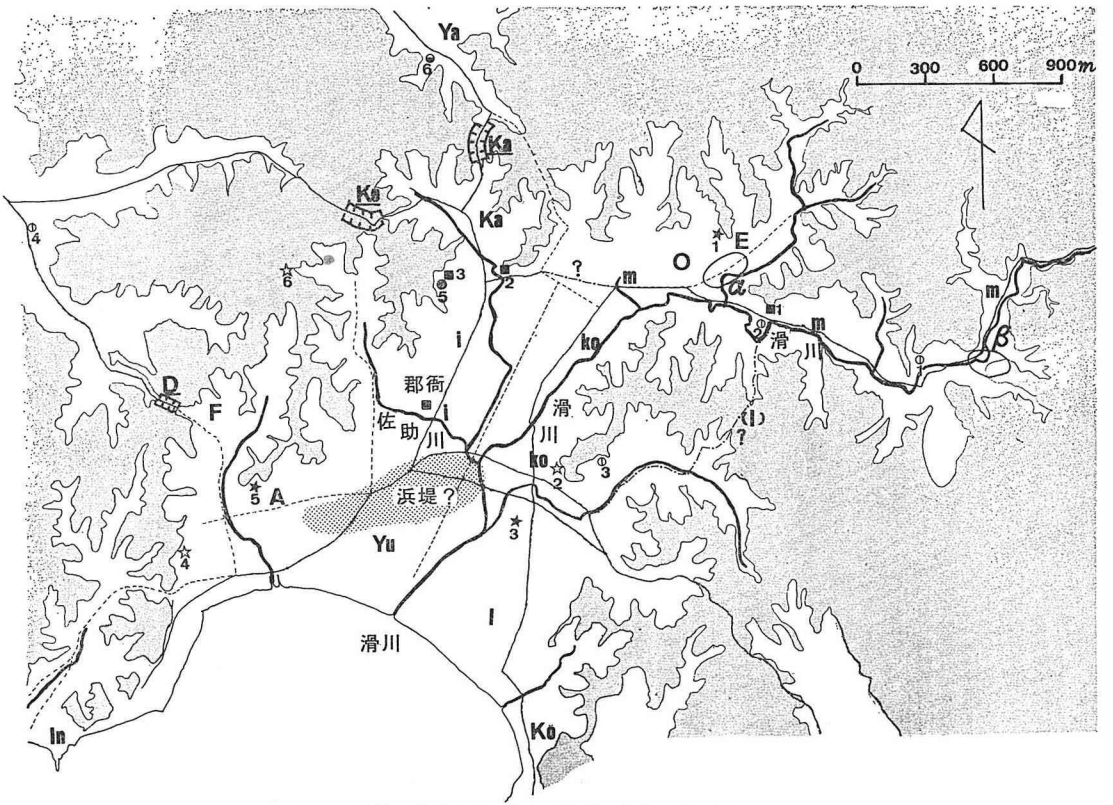

図1　寺社・御家人邸・幕府諸施設の分布　第Ⅰ期
α：二階堂向荏柄遺跡　　β：十二所鑪ヶ谷遺跡

凡　例

神社	★	同時期の文献等により存在が確認できる
	☆	後世の史料等で存在が示唆できる
寺院	■	位置が同時期の文献に記録，または発掘で確認，または明治以後まで存在。創建時期が同時期の文献に記載
	◪	位置が同時期の文献に記録，または発掘で確認，または明治以後まで存在。創建時期を後世の史料，または伝承，または初見時期で推定
	▲	位置を後世の史料，または伝承，または小字地名で確認。創建時期が同時期の文献に記載
	△	位置を後世の史料，または伝承，または小字地名で確認。創建時期を後世の史料，または伝承，または初見時期で推定
	◪	大体の位置比定は可能。創建時期が同時期の文献に記載
	□	大体の位置比定は可能。創建時期を後世の史料・伝承・初見時期で推定
武士の邸宅	●	同時期の文献のみで位置の確定可
	◑	同時期の文献かつ後世の史料，または伝承で位置の確定可
	◐	後世の史料，または伝承のみで位置の確定可
	◒	大体の位置比定が可能
	⊙	同時期の文献のみで位置の確定可の北条氏の邸宅
	◎	同時期の文献で推定される北条氏の邸宅
地名	地区名	O：大倉，E：荏草，Ka：亀ヶ谷，Ya：山内，F：深沢，A：甘縄，Yu：由比，I：飯島，Ko：小坪，In：稲村ヶ崎，Na：名越，M：前浜，W：和賀江島，To：常盤，Sa：佐介，Ni：二階堂，H：長谷，Ss：佐々目，Ta：宅間ヶ谷，Ik：犬懸ヶ谷，Og：扇ヶ谷
	切通し	Ka：亀ヶ谷切通し，Ke：化粧坂切通し，D：大仏坂切通し，Sh：釈迦堂切通し，Na：名越切通し，As：朝比奈切通し，Ko：巨福呂坂切通し，G：極楽寺坂切通し，(I)：犬懸坂
	道路	m：六浦道，ko：小町大路，i：今大路，o：大町大路，ku：車大路，w：若宮大路，y：横大路
	?	同時期にその名称が使われていたか不明な地名
	—·—·—	推定される道筋

位置に関しては，建造物や狭い地区名を基準とした位置表示の場合「位置が確認できる」とし，地区名や道路名等のみによる位置の記述の場合は「特定不可」とした。時期に関しては，神社・寺院は，創建された後は存在し続けたとみなした。御家人の館に関しては，ほとんどが築造および衰廃の時期が明確でないため，文献に登場する期間をもって確実に存在している期間とみなし図に記入した。結果，確実に存在したと思われる建造物は図表全体の数十パーセントしかないが，確実さがあいまいなものを加えても空間構造の傾向は変わらないと考える。なお，当該期に新設される建造物のみに数字を付して図1・2・4・5・6と表1に示した。数字のない建造物は当該期以前に建設されたものである。

本寺（寺1）・荏柄天神社（★1）・窟堂（窟2）・源氏の館（館5）・杉本氏（①1）や梶原氏（①1）の館が点在する。また、二階堂向荏柄遺跡⑧（α）では、住居址七軒が、十二所鑪ヶ谷遺跡⑨（β）からは奈良・平安時代の土器が検出され、『相模国封戸租交易帳』⑩・『和名類聚抄』⑪にも「荏草郷」という地名が登場し、集落の存在がうかがえる。つまり、滑川上流部一帯に寺社・武家の邸宅・集落が存在し、これらを結ぶ道として、六浦道⑫が頼朝入府以前には開通していたものと考えられる。この道は鎌倉の外港六浦へ至る重要な交通路でもある。

また、南の海寄りに元八幡（★3）・御霊神社（☆4）・甘縄神明社（★5）・八雲神社（☆2）といった神社が点在し、稲村ヶ崎より甘縄を経てそれらを結び滑川下流部の浜堤上を通り名越から逗子へ抜ける道があったと推定される。鎌倉の平野部海岸側には何条かの浜堤が形成され、平野はその後背湿地内に堆積した粘土が主要素である。⑬近くの江ノ島が陸繋島であることを考えると、三浦半島の西部の沿岸流の作用は大きく、そのため浜堤が生じた可能性が高い。実際、現在の一の鳥居付近に浜堤の頂部があった⑭ことが明らかになっている。また、発掘の結果、若宮大路の西側では佐助川を境にして堆積土層が変化し、川の南が砂質土、北が粘土層であることがわかった。⑮この佐助川と滑川の合流する地点の南に前述の浜堤がある。つまり、この浜堤の背後は粘土層で二本の川の合流地点の氾濫原でもあり、十三世紀に飛砂によって埋め立てられるまで後背湿地の原状をとどめていたと推定される。したがって居住には適さない。また、滑川の東方においても後背湿地が広がっており、⑯同様に居住には適さない。これらを避けて図1のように北側に大きく湾曲して、浜堤上に道路⑰が通っていたと考えられる。

以上の二本の東西道が当時の鎌倉の中軸線である。ここで注目したいのは寺社・武家の館は谷（やつ）の中、あるいは山際に存在していたということである。前述の地形条件および交通路からすれば、館と集落は谷の中および二本の東西軸沿いという限定された地域にしか立地していなかったと考えられる。この二本の東西道を結ぶ南北の交通路⑱として推定されるのは、現在小町大路と今大路と称されるルートである。後述するように、これらの起源はおそらく谷と谷を結ぶ道路として自然

発生的に生じたものと考える。以上より、本節の冒頭にあげた『吾妻鏡』の記述は、頼朝入府後の繁栄[19]を誇張するため、以前の鎌倉を過小に評価した表現であろうと思われる。

2　第Ⅱ期　大倉幕府時代（図2）

治承四年（一一八〇）十二月に大倉幕府が造られ[20]、養和元年（一一八一）七月には鶴岡八幡宮の社殿の造作が始まる[21]。翌同二年（一一八二）三月には、鶴岡八幡宮社頭から由比の浦まで若宮大路が真っ直ぐに通じた。

図2より御家人の館の分布をみると、その多く、特に宿所が大倉に集中していることがわかる。これは大倉に幕府及び政所・侍所・問注所等の幕府諸施設が集中していたためである。幕府は『吾妻鏡』および地籍図[22]の検討により、本稿で図3に記した位置に比定した[23]。また、幕府諸施設の位置は『吾妻鏡』より以下のように推定される。侍所は大倉幕府完成時には幕府内に存在していた[24]。政所[25]は幕府完成当初の位置が不明であるが、遅くとも寛元二年（一二四四）まで幕府郭内に存在していた可能性はある。公文所・問注所は幕府内から建久十年（一一九二）に執事三善善信邸に移転し[26]、その後遅くとも弘長元年（一二六一）には政所と併設されている[27]。以上よりこれら諸施設がこの第Ⅱ期に、一時期にしろ幕府内もしくは近接して所在していたと指摘できる。ここで図3の地籍図を検討すると、幕府比定地の東北の一画を細長い水田が取り囲み、その内部を細分化しているのがみてとれる。この一区画は、例えば有力御家人クラスの本邸とみられる今小路西遺跡の武家屋敷[28]と比べると、比較にならないくらい小さい。つまりこの一区画を屋敷ではなく宿所と考え、幕府近辺に集中する御家人の宿所とし、中でも特にやや大きな区画を、前述の『吾妻鏡』からの推定より、幕府諸機関と考えることもできる。即ち、大倉幕府郭内に侍所等の幕府諸機関や宿所が存在していたとの仮説を提示したい。

頼朝が幕府の地として大倉を選んだ理由は『吾妻鏡』には記されていないが、「四神相応」の地であったためとの見解[29]もある。しかしそれよりむしろ石井進氏が指摘するように、大倉が第Ⅰ期からの幹線道路である六浦道に面し、かつ滑川に

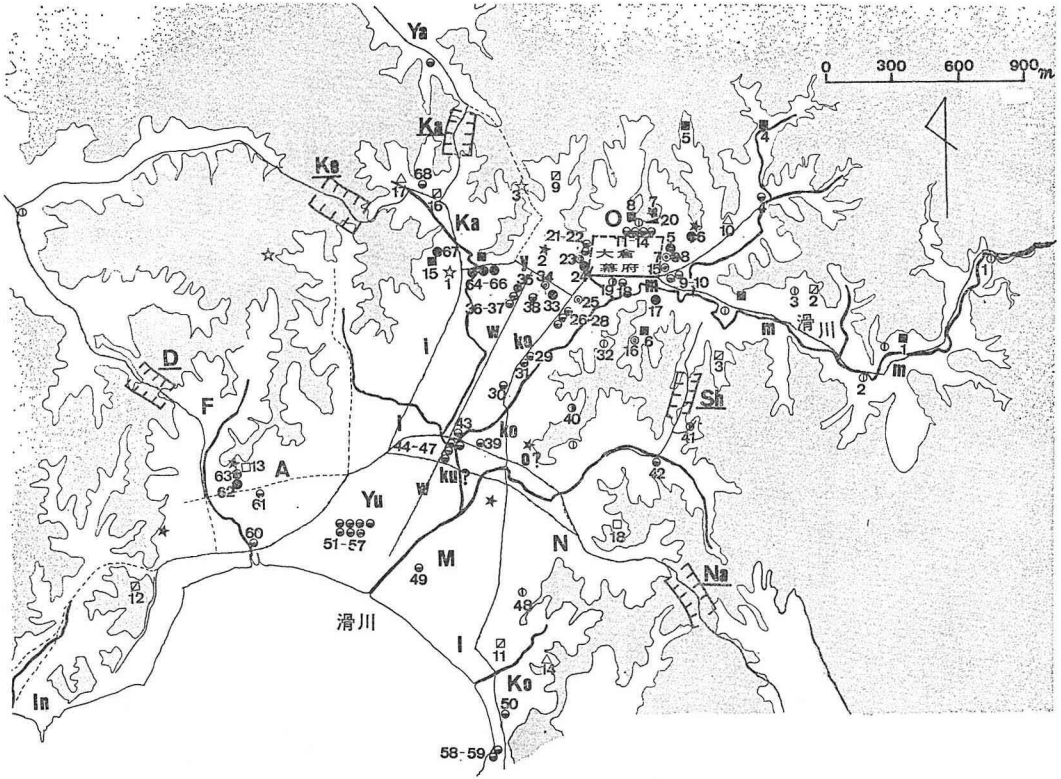

図2　寺社・御家人邸・幕府諸施設の分布　第Ⅱ期

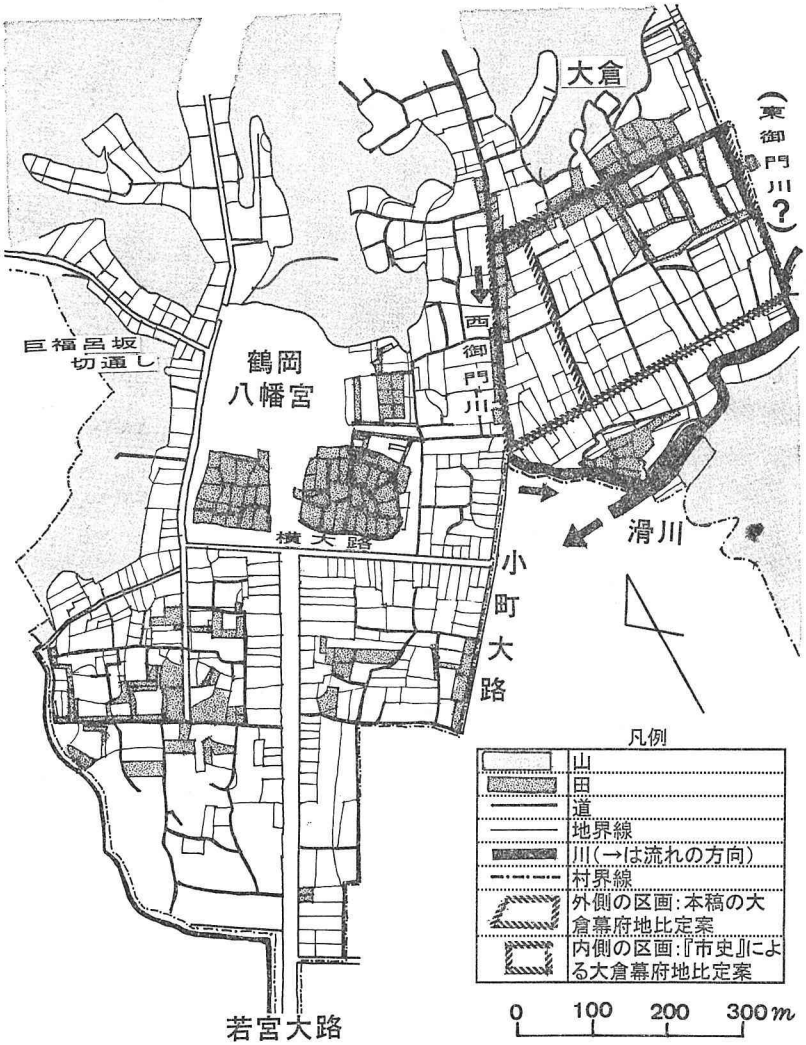

図3　雪ノ下村地籍図と大倉幕府比定案
図中の『市史』による大倉幕府比定案は「大倉幕府址想定図」（本文注二章②ａ）を基に作成。

沿った谷の中であることの方が重要である。[30] 前節で述べたように鎌倉の基軸はもともとこの六浦道と浜堤上を通る南側の東西道の二本であったが、都市鎌倉の建設に伴い第Ⅱ期には六浦道の方がより重視されるようになったといえる。このいわばメインストリート沿いに政治的中心である幕府と宗教的中心である鶴岡八幡宮が建設されたのは自然なことである。また地形をみると、鶴岡八幡宮東方一帯は滑川の南向きの河岸段丘上に位置し、前述のように弥生時代から集落立地に利用されている。それに対し、平野部の若宮大路西側は前節でふれたように低湿地であったと推測される。幕府と御家人邸はこういった地形条件に規制され大倉に決まったとの指摘[31]もある。

この時期には、幕府造営と前後して、新しく鎌倉に移住した御家人の館が次々に造られた。それらは幕府近辺の大倉や六浦道沿いの谷の中が多いが、有力御家人は幕府から少し離れた谷の奥あるいは入口に邸宅を構える「谷立地傾向」がある。例えば、北条時政は名越谷の最奥部（◎41）、初代問注所執事三善康信は名越谷の中（◑42）、二階堂氏は幕府東北の谷の奥（◒4）、比企能員は現比企ヶ谷（◑40）、安達氏は甘縄の谷の入口（◒62）である。谷につくられた建造物は御家人邸だけではない。この時期に幕府と密接な関わりをもつ寺も谷立地傾向を示す。例えば、頼朝の御願寺であり幕府の官寺として公的に経営管理され、盛時には鶴岡八幡宮と並び隆盛を誇ったという永福寺と勝長寿院は、永福寺が幕府東北の谷の最奥部（■4）に、勝長寿院が現大御堂ヶ谷（■6）に位置した。このような谷の中を充塡していく谷立地傾向は第Ⅰ期の踏襲であり、武士頼朝の館である幕府も大倉という滑川のつくる谷の内に造営されたと解釈される。結果、若宮大路は造営されてはいたものの、この時期にはまだ都市の基軸に成り得なかったといえる。

3　第Ⅲ期　宇津宮辻子・若宮大路幕府時代前期（図4）

この時期の最後には、北条氏が最大の政敵であった三浦氏を宝治合戦で滅亡させ、他氏排斥を完了させた。つまりこの時期は、北条氏の権力の確立過程にあり、政治的には幕府の成長期・確立期といえる。同時に都市鎌倉にとっての成長・

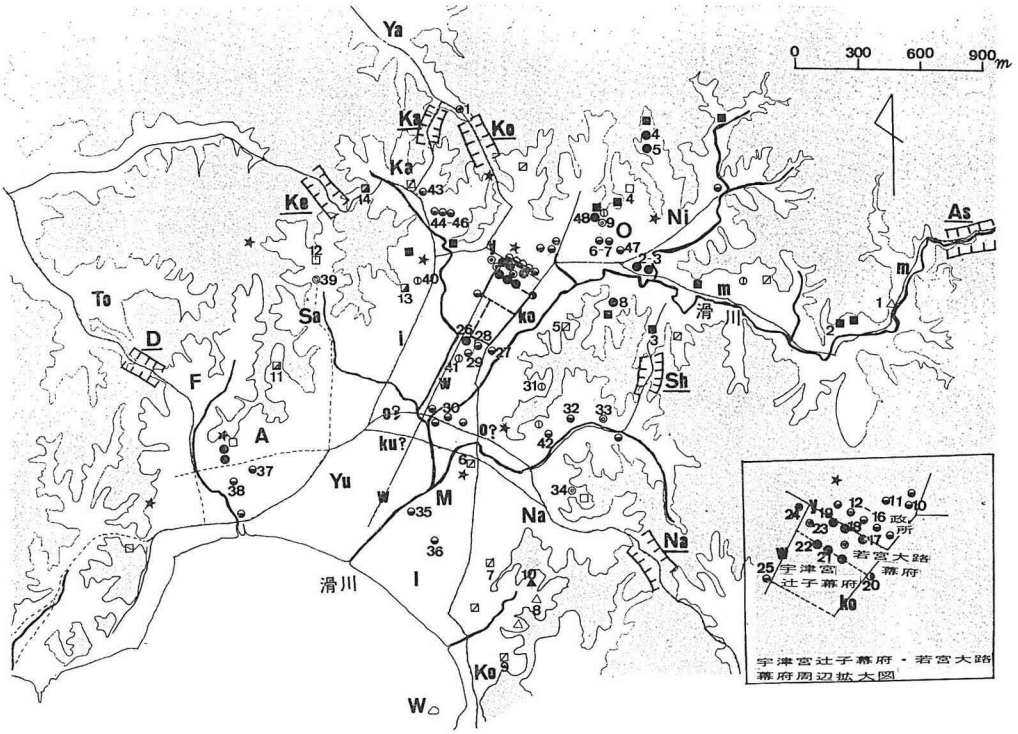

図4　寺社・御家人邸・幕府諸施設の分布　第Ⅲ期

発展期でもあった。その都市成長の端緒となるのが宇津宮辻子への幕府の移転である。宇津宮辻子幕府の位置については一致した結論が出ていない。[32] 同様に、嘉禎二年（一二三六）に移転した若宮大路幕府についても、二説がある。[33] 正確な比定地がどこであれ、六浦道という東西軸上の谷の中から若宮大路という南北軸上の平野部へ、政治の中心が移動してきたことは確かである。

図4より、幕府の移転に伴い大倉に密集していた御家人の宿館が、大倉に残るものもあるものの、多くが若宮大路東側の幕府周辺に新設されていることがわかる。と同時に、鎌倉全体に散在するという傾向もみてとれる。例えば、前節であげた二階堂氏・三善氏・安達氏はひきつづき谷の中や入口に邸宅を構えている。北条氏は、幕府の近隣はもちろんのこと、一族を鎌倉の地形的な境界に配し、対外的な攻撃に備えた。例えば、名越の切通しは大切岸を備えた特に厳重な切通しであるが、その鎌倉側の入口付近には代々名越氏と称される北条時章・朝時の一族を配して（◎34）、三浦半島を本拠とする最大の政敵の三浦氏を警戒していた。さらに第Ⅳ期になると、七代執権政村の別業が常盤に（図5⊙56）確認される。つまり、それらは谷の奥や山際に位置する。また、後述するように第Ⅳ期の町屋の位置を考えると、平野部の中心に商業機能が存在していたとは認めにくい。したがって、前時期からの「谷立地傾向」はなくなったのではなく、存在意義をもってなお生き続けていたといえよう。即ち、前時期からの空間構造を残存させつつ、第Ⅲ期には若宮大路という南北軸が都市の基軸として機能し始めたといえよう。

さらに図4より、新しく建造された寺院の立地をみると、泰時の建立した釈迦堂（■3）や義時の法華堂（■4）、頼家の御願寺である五大堂（■2）といった幕府に関係の深い寺院は谷立地傾向を示す。その一方、光明寺（▨9）や実相寺（▨7）等の寺は、寛喜四年（一二三二）の和賀江島築造による飯島地区の発達により、海岸部に作られており、寺院も全体として御家人邸の立地と同様の動きを確認できる。

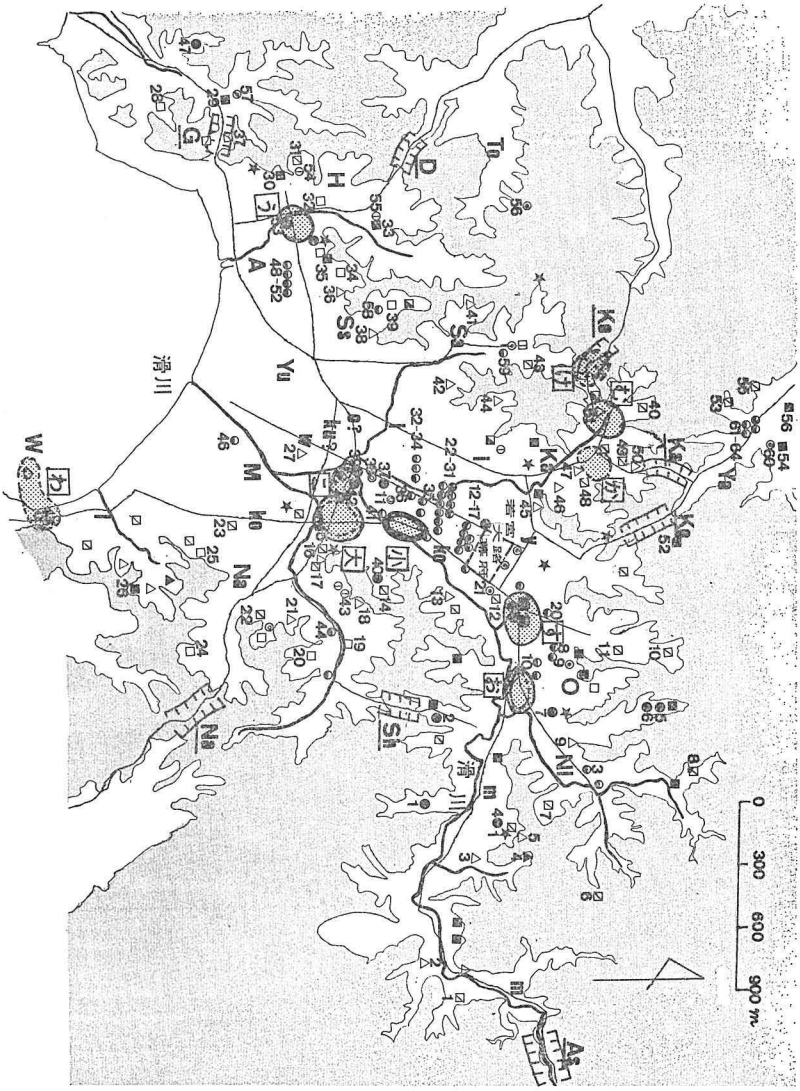

図５　寺社・御家人邸・幕府諸施設の分布　第Ⅳ期
円状のハッチは〔『吾』：建長３(1251) 12・3〕記載の町屋
破線のハッチは〔『吾』：文永２(1265) 3・5〕記載の町屋
小：小町，大：大町，こ：米町（1251）穀町（1265），お：大倉辻，わ：和賀江，
け：気和飛坂山上，か：亀谷辻，す：須地賀江橋，う：魚町，む：武蔵大路下

4　第Ⅳ期　若宮大路幕府時代後期（図5）

この時期は鎌倉の円熟期ともいうべき時期である。都市構造も複雑で多機能を有するようになり、都市機能や居住の密度も高くなる。中でも商業は、貨幣経済の浸透もあって大きく発達し、町屋と呼ばれる商業地区が成立する。『吾妻鏡』建長三年（一二五一）十二月三日条に「鎌倉中小町屋之事被定置処々。大町　小町　米町　亀谷辻　和賀江　大倉辻　気和飛坂山上」、その十四年後の文永二年（一二六五）三月五日条に「鎌倉中被止散在町屋等被免九ヶ所。（中略）町御免所之事一所大町　一所小町　一所魚町　一所穀町　一所武蔵大路下　一所須地賀江橋　一所大倉辻」との記載があり、具体的な町屋地名が挙げられる。これらの推定地を図5に示した。[34]

図5より全体の都市形態をみてみる。御家人邸・寺社は、若宮大路および小町大路等の南北路沿いにも分布が広がっていることが注目される。若宮大路という南北の都市の基軸を中心とする空間構造はさらに強化されているといえよう。しかし同時に、御家人邸・寺社は前時期に引き続き谷の中、山際にも立地する。東西の二本の基軸、六浦道と大町大路のうち、大町大路沿いの特に切通しの内側の名越と長谷にも寺社や御家人邸が多く新設されている。これは、極楽寺切通しが開削され、南の東西道が足場の悪い稲村ケ崎を通らないですむようになって交通路として重要度を増したことが原因であろう。それに沿って大町・小町・魚町といった商業地も成立したものと考えられる。また、六浦道沿いの巨福呂坂の外である山内にも、新しく幕府の保護した禅寺が立ち並ぶ。これらの結果、全体として寺社が増え、谷の中、山際、さらには平野部へと進出してきている。

5　第Ⅴ期　鎌倉府時代（図6）

鎌倉幕府が滅亡しても、寺社は前時期と同位置に引き続き立地していたが、政治施設や武士の邸宅は鎌倉時代とは大き

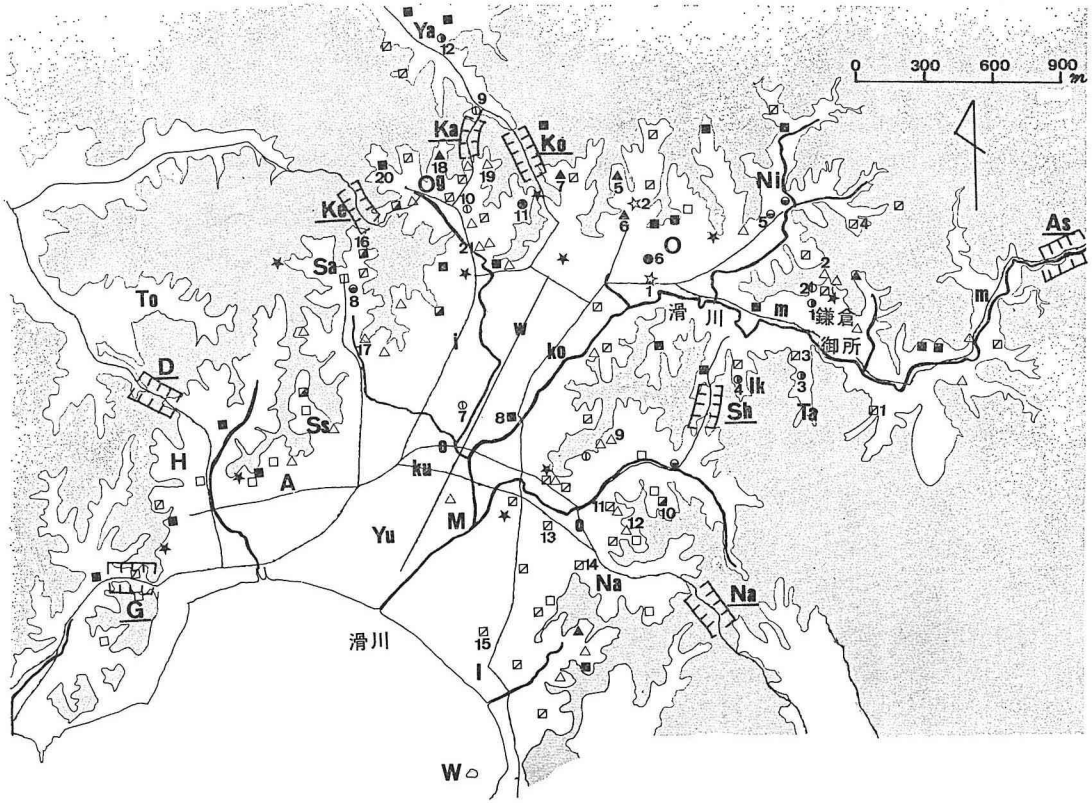

図6　寺社・御家人邸・幕府諸施設の分布　第Ⅴ期

く異なる所に新設される。まず、政治的中心となる関東公方の住む鎌倉府の御所は、滑川上流の谷の中（Ⓟ1）に移る。関東管領の上杉氏は、山内上杉氏（Ⓟ12）・犬懸上杉氏（Ⓟ4）・扇ヶ谷上杉氏（Ⓘ10）・宅間上杉氏（Ⓟ3）に分流し、各々その名の地に本拠を構える。鎌倉幕府の御家人であった二階堂氏や三善氏は鎌倉府でも重用され、邸宅もそのまま谷の奥に残る。これらはみな北側の谷の中である。即ち都市の中心は六浦道沿いの北部山あいの谷、特に滑川上流部に移ったといえる。[35] 都市として発達していた平野部に関しては、推測の域を出ないが、以下のことが考えられる。鎌倉攻めによる都市の荒廃は相当なものであっただろうが、都市民が全くいなくなった訳ではない。おそらく若宮大路周辺の武士の邸宅や公的区画が消失し、商工業地区はさらに中心へと拡大したであろう。それは、発掘からも、切石を伴う竪穴の町中への進出、側溝の埋没、道路への建物の張り出しが検出されることからも知られる。[36] つまり平野部には、浜地からさらに若宮大路一帯まで商工業地区が展開していたのではないか。都市としての繁栄は十四世紀一杯までは続くが、その後永享の乱後の十五世紀になると考古学的調査によれば建物が農村的になることが指摘されている。[37] 人口は大幅に減少し、都市としての中心性を欠き、鎌倉の都市的性格は薄まっていくといえる。

① なお、第Ⅱ期と第Ⅲ期の区分は従来仁治元年（一二四〇）とされてきた（『国史大辞典』三「鎌倉」の項　吉川弘文館一九八二　五三九頁）が、本稿では松尾剛次氏の見解（一章⑨c五八～六〇、六八～九〇頁）にしたがって、政権の移動する宇津宮辻子幕府の移転を区切りとした。

② 比定に際し次の文献が参考になった。『鎌倉市史・社寺編』a『同・総説編』吉川弘文館一九五九。貫達人「北条氏亀址考」金沢文庫研究紀要八一九七一。『全訳吾妻鏡』一～五、別巻　新人物往来社一九七七。貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』有隣堂一九八〇。一章③a。一章③c。白井栄二編『鎌倉事典』東京堂出版一九九二。京都大学文学部地理学教室蔵　須原屋茂平板『鎌倉絵図』安政三年作成。

③ 『吾』治承四年（一一八〇）十月六日条。

④ 『吾』治承四年十二月十二日条。

⑤ 『吾』治承四年十月十二日条。

⑥ 『玉葉』寿永二年（一一八二）閏十月二十五日・同年十一月二日条で、九条義実は「鎌倉城」の表現を使っている。

⑦ 『吾』治承四年十月七日条。また、『吾』治承四年九月九日条に、当時頼朝のいた安房国は鎌倉と違って「要害」の地でも「御旗跡」の地でもないので早く鎌倉に入るべきだとの千葉常胤の発言がある。

⑧ 『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会一九八五。

⑨ 『鑪ヶ谷遺跡』鑪ヶ谷北遺跡発掘調査団一九八三。

⑩ 天平七年（七三五）閏十一月に作成された『正倉院文書』。

⑪「鎌倉郷」の項に記載。『和名類聚抄』は平安時代中頃に成立。

⑫ 現在の鶴岡八幡宮の東側に「筋替橋」の地名が残るが、これは八幡宮が移転される以前に図1のようにまっすぐ義朝邸へ向かっていたであろう六浦道が、八幡宮の建設により分断されずれが生じたということを示す地名であろうという指摘がある。一章④二十頁。

⑬ 一章③f十四頁。

⑭ 斎木秀雄「鎌倉の地形を復原する」一章③a。

⑮『国指定史跡若宮大路発掘調査報告書』Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ 若宮大路遺跡発掘調査団一九八九～一九九三。

⑯ 清水莱穂「中世鎌倉の基本層序」一章③b。

⑰ この道を古東海道とする指摘もあるが、武蔵国が東海道に編入されてからの三浦・房総半島へ向かう東海道の支線という方が可能性として高い。藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅰ』大明堂一九七八 一五八頁。

⑱ 馬淵和雄氏はもう一本の南北道、杉本寺前から犬懸坂を経て名越へ抜ける道（図1参照）の存在を指摘する。一章④二十一頁。

⑲『吾』治承四年十二月十二日条。「加之家屋並焼。門扉塀軒云々。」

⑳『吾』治承四年十二月十二日条。

㉑『吾』養和元年七月八日条。

㉒ 本稿で使用した雪ノ下村・材木座村・大町村の地籍図は、鎌倉国宝館蔵・京都大学文学部金田章裕教授撮影の写真である。

㉓ 幕府の位置に関しては『鎌倉市史』が比定案（図3参照）を提示しており、（前掲②a一六一～一六四頁。）松尾氏の研究もこれを踏襲しているが、必ずしも範囲は明示されていない。（一章⑨c三七～四〇頁。）そこで、今まで全く考慮されてこなかった明治期の雪ノ下村の地籍図（図3）を新たに検討し、大倉幕府の範囲を再考した。これより西御門川に沿って細長い水田がのび本稿比定地の北辺と西辺を囲んでいることが読みとれる。それに加え、比定地の東南角村近で七世紀頃の幅六メートル・深さ二メートルの人工のものと思われる大きな溝が発掘され（『大倉幕府周辺遺跡群』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団一九九〇）、これが東御門川の旧河道あるいは堀とすれば、大倉幕府造営の前後に土地を区画する境界線のようなものが存在していたといえる。よって、図3の水田も幕府の外郭と考えるのが最も妥当であろう。

㉔『吾』治承四年十二月十二日条。「前武衛「将軍」新造御亭有御移徙之儀。（中略）入御于寝殿之後御供輩参侍所十八ヶ間。」

㉕『吾』文治三年（一一八七）四月十四日条「政所罹震。雷落于因幡前司廣元既之上。」からは大江広元邸内に政所が存在していたように解釈できる。『吾』承久元年（一二一九）二月十四日条「将軍家政所焼亡。失火云々。墺内残一宇者云々。」からは将軍の居住する御所内に存在していたともとれる。しかし寛元二年（一二四四）十二月二十六日条「武州并北条左親衛等第依失火災。余焔飛行。政所焼亡云々。」とあり、政所が小町の北条氏邸（図2◎34または◎25）の近辺にあり、また幕府の建物に全く触れられていないことから既に幕府郭内にはなく、図4に示す位置にあると思われる。ここでは発掘からも側溝の内側に土塁が検出され、公的機関の存在が窺える。『政所跡』政所跡発掘調査団一九九一。

㉖『吾』元暦元年（一一八六）十月二十日条。「依点御亭東面廂二ヶ間。為其所。号問注所。」『同』建久十年四月一日条。「被建問注所於墺外。（中略）是故将軍御時、営中点一所。（中略）以善信家為其所。今又被新造別墺云々。」

㉗『吾』弘長元年三月十三日条。「政所之墺内失火。廳屋。公文所。問注屋炎上。」

㉘ 一章③f五七～五八頁。

㉙ 一章⑨c三六～三八頁。

㉚ 石井進氏が、前章で述べた都市基軸の転換に関する研究の中で指摘している。

㉛ 斎木秀雄「都市域の変化と若宮大路」前掲⑮『若宮大路発掘調査報告書』Ⅶ　二十三頁。

㉜ 宇津宮辻子幕府の位置比定に関しては『鎌倉市史・総説編』の説と松尾剛次氏の説の二説がある（前掲②a一六七～一七二頁。一章⑨c四五～五七頁）。『吾』の文献解釈としては『市史』説より松尾説が自然であると考え、松尾説を採用し図4中に点線で記入した。

㉝ 若宮大路幕府の位置比定に関しても宇津宮辻子幕府と同一敷地内にあったとする『市史』説と、両幕府が別区画にあったとする松尾説の二説がある（前掲②a一六九～一七一頁。一章⑨c五一～五五、六三～六六頁）。本稿では文献解釈として別区画説を妥当と考え、図4中に点線で示した。

㉞ 図5の町屋は『市史』及び石井進氏の見解を採用して位置比定した。（前掲②a二五六～二九二頁。一章⑧a三八頁。）

㉟ 舟運が盛んとなり、和賀江島より自然条件のよい外港六浦の重要性が再び増し、六浦道の需要が高まったため、そして鎌倉府の実力が鎌倉幕府と比べて乏しかったので、防御に便利な山間部の谷の奥に本拠をおいたとの指摘がある（山田邦明「室町時代の鎌倉」『都市の中世』吉川弘文館一九九二）。

㊱ 一章③e九一頁。

㊲ 一章③e九二頁。

三　空間構造とその変遷

1　都市計画説の再検討

前章で明らかにした空間構造は、石井氏の東西から南北への都市軸の転換に関する論に基本的に同意するものであった。とすれば馬淵・大三輪両氏が前提とする、鶴岡八幡宮と若宮大路を中心とする空間構造は、都市鎌倉の成立時から存在していたとは言い難い。よってもう一方の前提である都市計画に大きな意味を求めるべきとは言えないのではないだろうか。この視点より、本節では第一章で紹介した馬淵氏と大三輪氏の都市計画説を再検討する。まず、馬淵和雄氏による平安京的都市計画案であるが、これは頼朝による都市計画が存在し、それは平安京造営計画を模したとするものであった。しかし頼朝は本当にそのようなことを考えていたのであろうか。

その点を考察するためには、頼朝の見た平安時代末期の京都はどんな形態をしていたのかが一つの重要なポイントであ

る。平安時代を通じて右京が荒廃し左京が発展して、都市は鴨川を越えて東に拡大することはよく知られている。頼朝と同時代の院政期から平氏政権下の短い期間、即ち平安末期の京都[1]は、本来の平安京外へ政治の中心が移動し、複数の地域が拠点的に都市として発達し、複合的な景観をみせる。白河は院政期の政治的中心となり、白河に直結する東西道の二条大路は延長され東西のメインストリートとなる。朱雀大路の南の延長である鳥羽の作道の終点、鳥羽も平安京の外港の役割を担い発展する。また、後白河上皇は鴨東の七条周辺に院の御所を営み、平氏は六波羅および西八条を本拠地とした。

すると、馬淵氏の「大内裏から朱雀大路が巨椋池へ向かって伸び、大内裏の東（左京）には官衙町が、さらにその東には白河「御所」がある。[2]」という「王朝国家期の平安京」[3]に無理があることがわかる。前述のように白河御所が存在する時には、官衙町は確かにかつての大内裏の東に位置していたものの、実質的な「官衙町」は院の近臣が詰める白河に、天皇の住む内裏も左京の土御門殿等に移っていた。頼朝の見知ったであろう京都は古代都城としての平安京でもなければ、馬淵氏のいう「王朝国家期の平安京」でもなく、平安京が大きく変容した京都であったといえよう。

しかし、頼朝が現実に体験していないとしても、頼朝が構想の上で古代都城的な都市づくりを考えていた可能性はある。では、実際に鎌倉は京都を倣った都市づくりがなされていたのだろうか。馬淵氏は若宮大路と鶴岡八幡宮という二つの設営を京都を模倣した都市計画の中心事業ととらえるが、それで積極的に言い切ることができるのかどうかを検討したい。

まず、若宮大路に関してであるが、第二章で述べたような鎌倉の都市化を考えると、若宮大路の市街地化は第Ⅲ期からであり、頼朝の生前には実現されていなかったといえよう。また『吾妻鏡』にも都市計画の構想は記されていない。したがって、若宮大路は第Ⅲ期になって都市の基軸とはなるが、古代の朱雀大路のもつ都市計画の基準線としての役割は有していなかったし、たとえ若宮大路を中心とする都市計画があったとしても頼朝は実施していないと考える。本稿では、若宮大路は『吾妻鏡』に表現されているように、「詣往道[4]」即ち単に鶴岡八幡宮の参道であったと考える。第Ⅰ・Ⅱ期には南の浜堤上を通る東西道は六浦道と同様に基軸として重視されており、この道からの参道が若宮大路なのである。若宮大

路と浜堤上の東西道との交差点に当時の浜の大鳥居が存在していたという事実がこの傍証となる。[5] つまり浜の大鳥居の存在は、この地点より北の若宮大路が参詣道であることを示していたととらえることができる。さらに、若宮大路周辺の溝の流れの方向を調べると、鎌倉時代前半においては大路から両側、即ち東西に向かって流れていたことがわかった(図7)。これより若宮大路の位置がもともとは微高地であったとすると、若宮大路の位置選定も馬淵氏の提示するような仮説[6]に基づいて決定されたのではなく、参道として適した水はけの良い微高地上であることを理由に作られた可能性が高い。また

図7　街路パターン・発掘結果と地割想定案
地割想定案は本文注一章⑤ b 48頁記載の地割想定図。溝は，本文注一章⑩ a 49頁と一章⑩ b 86頁より引用。

造営の際盛り土をしたとすると、若宮大路は都市の基準線としての機能よりも、平野部の南側の浜堤と北側の八幡宮・大倉周辺の間の低湿地を南北にしめきることによる大路西側平野部の乾地化を意図した堤防[7]としての機能を有していた可能性があると考えられる。また、鶴岡八幡宮に関しても都市計画の一部としてその位置が決定されたのではなく、当時の主要街道であった六浦道沿いに源氏の鎮守社を配置したという意図をくみ取るべきである。即ち第Ⅰ期の空間構造を考えるに、鶴岡八幡宮の配置は六浦道に面することに最大の意義があったといえる。[8]

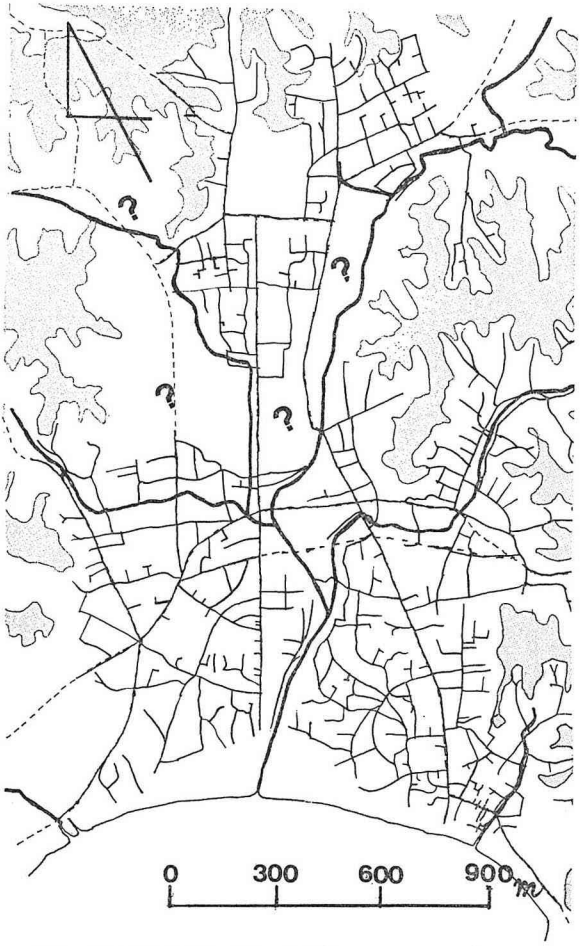

図８　地籍図からみた大町・材木座・雪ノ下村の街路パターン
？の部分は地籍図未見

以上のことはいずれも頼朝が古代の都城プランを模範としたプランを構想したり、実施したという考えに対して否定的である。

次に大三輪龍彦氏による方眼状地割案を再検討する。この案に対する最大の疑問点はまず第一に、現在においても明治時代の地籍図（図７・８）においても、若宮大路を越えて東西に貫く道路がほと

んどないという事実である。東西に貫通してかつ小町・今大路まで至っているのは頼朝入府からの主要道である横大路と大町大路くらいで、他の道は若宮大路で相互にずれているものが多い。若宮大路から東西にそれぞれのびていても、小町・今大路まで到達しない場合もある。全体的に見て鎌倉の街路パターンは不規則である。明治期と中世ではかなりの時間の隔たりがあること、その間に鎌倉は都市性を失ってしまったことを差し引いても、この不整合は方眼状地割が実際には施行されなかったことの一つの証拠になるだろう。

第二に、発掘によっても、現在まで大三輪氏の想定図の推定道路と合致する道路や溝がほとんど検出されていない点である（図7）。さらに十三世紀の鎌倉時代前・中期の溝は多くが若宮大路に斜交していることにも注意を要する。若宮大路に直行ないし平行する溝は、十四世紀頃の鎌倉後期のものにはいくつかあるが、それにしても若宮大路周辺に限られる。この発掘結果を大三輪案では説明できない。馬淵氏は北条泰時の時に街区が方眼区画に再編されるとするが、[9] 鎌倉には古代的条坊プランは施されなかった可能性の方が高い。

第三に、大三輪氏の想定図自体が方眼を鎌倉に施す過程で地形に合わせることを基準としたもので、現実の市街形態を考慮したものではない。大三輪氏自身、この方眼状地割案は可能であるとするにとどめ、発掘調査で存在を裏付ける結果が出ていないことを認めつつも概念として存在していたと考えている。ところが、先に述べたように古代的都市プランは構想上も存在しなかった可能性が高く、本稿ではその考えに否定的である。鎌倉には、古代都城的な都市プランは模倣・実施されることなく、条坊的な方眼状地割も存在しなかったと考えられる。

2　街路の成立と辻子

古代都城的な都市プランおよび条坊的な方眼状地割の存在が否定されると、では鎌倉の都市形態はどのような過程を経て成立したのであろうか。まず、街路の成立過程の考察を通してこの課題を検討したい。

第Ⅰ期の鎌倉は南北二本の東西道に沿って施設が点在し、谷の中に武家が邸宅を構えていた。この時期の住居は、東西道沿いの山際の神社付近や小さな谷および谷周辺に集中していたであろう。その結果、谷と谷とを結ぶ交通路が必要となる。その一つが谷の入口と入口を結ぶ平野部の山際の道である。これが小町大路・今大路の原型であったと考えられる。つまり、これらはいわば住民の生活の必要より生じた自然発生的な道である。小町・今大路の正確な位置も成立時期も確定できないが、前節で述べたように計画的地割が行われていないとすれば、現在とさほど変わらない位置に頼朝入府以前から存在していたと考えられる。頼朝入府後も、武士の邸宅の谷立地傾向は鎌倉における御家人の増加に伴いむしろ強化された。そして武士の邸宅を結ぶ小町・今大路もより頻繁に使用されるようになり、重要度を増したとみられる。即ちこの二本の南北道は新設された若宮大路とは性格を異にする交通路なのである。

谷と谷を結ぶもう一つの交通路は、隣接する谷の奥と奥を切通し的に開いて結ぶ山道のようなものである。例えば、釈迦堂ケ谷と名越谷を結ぶ釈迦堂の切通しが挙げられるが、これは名越谷の奥の北条時政邸と大倉幕府を結ぶために作られたものであろう。この他にも鎌倉内の谷と谷を結ぶ切通し的な山道は数多く存在していたと思われる[10]。これらは七口と呼ばれる化粧坂切通し・名越切通し・亀谷切通し等とは性格の異なるものである。鎌倉内の谷と谷を結ぶものは日常の交通路であり、切通し的ではあってもそれ程大がかりな整備は不要であったであろう。そのため、谷と谷を結ぶ山道の多くは現在まで残っていないと思われる。例外的に現存する釈迦堂切通しは、北条氏と大倉幕府を結ぶ交通路であったからこそ大規模なものになったとみられる。

頼朝入府後人口の増加に伴い、平野部にも新しく街路が生じる。が、現在においても、発掘においても、若宮大路を越えて東西に貫通する道がほとんどない。なぜ鎌倉の中心部にくいちがいや袋小路の道が生じてくるのだろうか。また、文献に現れる鎌倉の「辻子」とはどのようなものなのだろうか。この二つの問いは、平野部における都市形態の成立を解明する上での重要な問いであろう。ここでは「辻子」とは何かという基本的な整理から始めたい。

従来、鎌倉研究の中で辻子は「小路より小さい道」[11]「通り抜けのできる道」[12]ととらえられてきた。大三輪氏も横大路と大町大路の間の東西方向の道路を辻子と考えているが[13]、これも従来の辻子の定義による。これらの辻子の定義は、坂本太郎氏の研究[14]を基盤とするものである。その後辻子に関しての研究は様々になされたが、辻子をその成立過程から考証し結論づけたのは、高橋康夫氏と足利健亮氏の一連の辻子研究[15]であった。高橋氏は、辻子は平安京では高密度な敷地利用としての新街区の開発や都市再開発において発生し、鎌倉においても急速な都市化に伴い開発されたと説明する。また、足利氏は辻子を「単に道であって、それに向かって町（家並み）・寺（寺並み）・大邸宅等が、その主要な頰（簡単にいうと正面）を、しかもかなり独占的に向けているといった道以外のものにつけられた名称である」と定義する。広義では「町通りではない道・町通りになる前の段階の通り」ともとらえられる。それには、町の横頰が辻子と呼ばれる場合もあったし、二つの町を結ぶだけの辻子も、塀と塀の間を通り抜ける辻子もあり、また家と家の横頰を割って入る袋小路の辻子もあったという。

この足利氏の辻子の定義をふまえた上で、鎌倉の辻子はどう説明できるだろうか。文献より鎌倉には、宇津宮辻子・田楽辻子・大学辻子・咒師勾当辻子・柳辻子・唐笠辻子の六つの辻子があったことが知られる。現在の鎌倉には辻子地名が残っていない上に、『吾妻鏡』と『北条九代記』以外の文献にほとんど登場しない。特に柳辻子・唐笠辻子に関しては、位置に関しての記載がなく、他の辻子もその正確な位置を知り得ない。しかし、宇津宮辻子・田楽辻子・大学辻子・咒師勾当辻子について文献を再検討[16]すると、これらは東西道で、少なくとも大町大路より北側で横大路より南側の範囲内にあったという共通条件が見つかる。また、これらの辻子の成立時期は不明であるが、初見の年から考えて、宇津宮辻子と田楽辻子は宇津宮辻子へ幕府が移転する以前から、大学辻子と咒師勾当辻子は遅くとも弘長三年（一二六三）には存在していたことがわかる。

これより、辻子の成立について以下のような解釈が可能になる。まず、第Ⅱ期に成立していた宇津宮辻子と田楽辻子に関して検討する。大倉幕府時代に、若宮大路周辺に何があったかは定かでない。第Ⅱ期の空間構造は、武家の宿館と寺社

の複合体であり、かつ第Ⅰ期からの空間構造を受け継いでいるとすると、この平野部はまだ市街として開発されていなかったと思われる。このような場所に若宮大路という幅三三・六メートルもの大路が通っているため、若宮大路から小町・今大路に連絡する通路が必要となる。この若宮大路から小町大路をつなぐ小さな道、これが辻子であったのではないか。そしてこの小さな道に、京都から伝わった「辻子」という名称がつけられたのであろう。極論をいうと、田畑・荒地の畔道や微高地などを踏襲した通り抜けるためだけの小道、そのような景観が想像される。

では、幕府が若宮大路側に移転してから成立した辻子はどのように解釈されるか。幕府の移転にともない武家の邸宅・宿所も多く若宮大路側に新設される。方眼状の地割はなされず、発掘で検出される溝もこの時期のものは多くが若宮大路に斜行していることを考えると、武家屋敷に規制はなく全体的に不規則な形態をしていた[17]と思われる。即ち、若宮大路の両側では様々な幅の御家人邸が立ち並んだといえよう。とすると、若宮大路から小町・今大路に連絡するには、その不規則な屋敷と屋敷の間をぬって通り抜けなくてはならない。そうするとこの裏道的な小さな道は、若宮大路で斜行したりくいちがいをみせるようになる。さらに若宮大路に面さない奥の屋敷へ行くだけの道は小町・今大路まで到達することなく、袋小路になったり途中で方向を変えることもあったであろう。発掘でも、屋敷に沿って直角に曲がったり、緩くカーブする裏小路が検出されている[18]。地籍図から検出した街路パターン（図7・8）でもそれは見てとれる。第Ⅲ期以降には若宮大路周辺には次第に武家屋敷が密集してきたこと、第Ⅳ期の町屋は中心から離れた坂や辻・浜地周辺に立地していたことを考えると、これらの通り抜け、あるいは屋敷に行くだけの道に沿って「町」ができることはなかった可能性が高い。この「町通りではない道」こそが辻子であり、「二つの大路を結ぶだけの辻子もあれば、塀と塀の間を通り抜ける辻子もあり、家と家の横頰を割って入る辻子」もあったものと考える。先に述べた四つの辻子が、図3・4によると武家屋敷の集中している大町大路から横大路の間にあったのもこの考えと合致する。なお、発掘結果より、若宮大路に面した武家屋敷は幕府と北条泰時邸を例外として、若宮大路に門を開けていなかったと指摘されている[19]。とすれば辻子に門を開けていたとい

うことになる。しかしその事実も、辻子＝「町通りではない道」とする定義に反するものではない。その後前節でふれたように、十四・五世紀になって若宮大路の近くでは溝が直行・平行するようになるが、まだその奥の区画では方向に統一性がない。若宮大路に側溝ができ、周辺では道の整備が行われたのであろうが、それはごく限られた範囲であり、なお辻子は残存していたと考えられる。辻子が今日まで地名を残していないのは鎌倉が一度市街を失ってしまっていたためであろう。通り抜けのための道が通り抜けとしても使われなくなり、名称を付す必要性すら失ったと考える。

鎌倉における辻子は、京都での辻子のような都市の再開発の概念というよりも、町の発生以前の都市成立過程の概念であり、高橋氏の指摘するように都市化により生じたと解釈される。足利氏も平安京において四面町発生以前には辻子は「大路・小路に対する小径、大路・小路でない京内の小径」であり、大路・小路の町通りへの「転回」に応じて辻子の語義も変わったと説明し、都市成立過程の辻子の存在を認めている。従来の辻子のとらえ方でも間違ってはいないが、辻子という名称は単なる通り抜けのできる小路ではなく、その背景に都市鎌倉の成立過程をともなっている点が重要であると指摘したい。

3　空間構造・都市景観の変容

頼朝入府以前の鎌倉には一定の集落が存在し、六浦道と南の浜堤上を通る道の二本が東西に延び交通と屋敷配置の基軸となっていた。集落は二本の道路沿い、特に道路に沿った谷の中や山際に分布していた。しかし馬淵和雄氏が述べるように「すでに十二世紀初頭の鎌倉には、これら御霊社（八雲神社（図1☆2））・荏柄天神社（同★1）・御霊神社（同☆4）・佐助稲荷（同☆6）に境界を守られるような集住形態が形成されていた」[20]とみるのはどうであろうか。第I期でみたように、平野部・谷内部全域を覆うような集住形態ではなく、二本の東西道を軸に、しかも寺社を中心に点在する形で集落は存在していたといえよう。[21]この段階ではまだ都市機能の集積は進んでいなかったとみられる。

頼朝は義朝の「御曩跡」であったため鎌倉を選んだ。そこには代々源氏の地盤であった鎌倉に居を構えることで源氏の棟梁としての地位・権力を継承しようとした意図が現れている。単なる武家の棟梁の居館とその家来たちの住居の集合であった鎌倉に政治的要素が加わっても、当初は二本の東西道を軸とした頼朝入府以前の空間構造にあまり変化はなかった。存在が知られる建造物の立地をみる限りでは、初期の鎌倉は武家の宿館（御所も含む）と寺社の複合体であり、滑川に沿う六浦道の東西線を中心として、谷の要所要所にそれらが散在していた。本稿で述べてきたように、頼朝は若宮大路を築造したものの、これを都市プランの基準線にしようとはせず、実際第Ⅱ期にはまだ、都市の基軸として定着していなかった。馬淵氏が述べるように「律令期以来の鎌倉の集落構造は崩れ、中世都市としての新たな枠組みに移行した」[22]のではなく、むしろ前時期の集落と交通路を残存させて、その空間構造を踏襲する形で、谷と六浦道中心の都市的機能は強化されたと考える。

以上の鎌倉の空間構造は、宇津宮辻子幕府への移転を期に大きく変化する。六浦道という東西軸から若宮大路という南北軸へと都市の基軸が変わったのである。第Ⅲ期になると、人口が大量に流入し、急激に武士邸・寺社が増加したため、谷内と六浦道周辺の土地は飽和状態になる。それと前後して街路や辻子がいわば自然発生的に生じる。このような「ひずみ」を修正して、鎌倉を都市として整備したのが北条氏である。しかし都市の整備は必ずしも鎌倉全体の理念的都市計画の施行を意味するものではなく、具体的には、京都から丈尺の制・戸主の制・保の制という都市的制度が導入され、巨福呂坂・朝比奈切通しの開削といった道路の整備が進められるといったことが、都市の整備であっただろう。また、この時期になって、都市軸は東西から南北へと転換し、若宮大路が都市の基軸として機能するようになる。それは幕府の移転に伴い御家人が多く若宮大路側に移住し、谷より相対的に平野部が発展するようになったこと、さらに鎌倉においても商業・産業が発達し、結果海運の利用が不可欠となって和賀江島が築造されたことと関係するだろう。この人工の貿易島の完成により、六浦に委ねざるを得なかった交易機能を、鎌倉の中心部に直接アクセスできる和賀江島がもつことができ、

飯島周辺は港湾機能を有し、海路を利用する交易が格段に発達するのである。以上のように政治・経済的要因が重なって、若宮大路は第Ⅲ期に都市の基軸となると考える。しかし、東西軸と谷が全く利用されなくなったのではなく、寺社、特に旧仏教の寺社および前時期から引き継いだ御家人邸はなお谷立地傾向を示す。そして平野部においてもそれらは進出し、同時に商業的要素も浸透してくる。つまり、政治機能の集中にともなう人口の増加により寺社・邸宅等の密度が高くなり、全域が都市として連結してきたいわば複合的発展過程が想像できよう。

その後の都市を発展させる大きな要因は商業の発展である。図5より、町屋は鎌倉の出入り口部分や、浜の近くや辻に、そして小町大路・若宮大路周辺に展開している。一方、寺社も新仏教の振興で格段と増加し、より平野部へと進出してくる。結果、若宮大路は都市の基軸としてより強化されるとともに、全体としての都市規模も拡大したとみられる。

鎌倉幕府滅亡後、空間構造は再び大きく変容する。政治機能は六浦道沿いの谷の中に集中し、商業機能は平野部に展開する。一見、頼朝入府以前・当時の東西軸を中心とした空間構造が復活したかのようであるが、南北軸を中心に商業・産業が展開し、南北軸も都市の重要な基軸であったと考えられる。この点が頼朝入府以前・当時と異なる。

鎌倉時代から室町時代前半の中世前半を通じ、以上のような空間構造の流れを指摘し得る。鎌倉は頼朝が造営を始めた都市ではあるが、その空間構造・都市景観は常に変容してきたのである。

① 平安末期の京都については以下の論文が参考になった。足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社一九九四　三六～三七、四六～四七頁。高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会一九八九　二〇三、二四九頁。朧谷寿編『王朝貴族と京都――資料――』光琳社出版一九八六　六一～九〇頁。井上満郎「院政期における新都市の開発――白河と鳥羽をめぐって――」『中世日本の諸相』上巻　吉川弘文館一九八九。高橋慎一郎「空間としての六波羅」史学雑誌一〇一ノ六　一九九二。高橋慎一郎「六波羅と洛中」『都市の中世』吉川弘文館一九九二。滝波貞子「東朱雀大路と朱雀河」『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版一九九一。村井康彦編『よみがえる平安京』淡交社一九九五　五七～七七頁。

② 一章④三一頁。

③ 一章④三一頁。

④ 『吾』寿永元年（一一八二）三月十五日条。

⑤ 二章⑮『若宮大路遺跡発掘調査報告書』Ⅶ。ここで検出された「浜の大鳥居」は出土遺物等から天文二二年（一五五二）に小田原北条氏

によって再建されたものであると考えられる。これを鎌倉時代の鳥居の位置と変わらないとする理由については二二一～二三三頁参照。

⑥ 一章④三一～三六頁。

⑦ 図2・4より第Ⅱ・Ⅲ期において若宮大路西側は東側に比べ建造物の分布が疎である。これは若宮大路の堤防化による西側乾地化がまだ不十分であったためであろうか。また、現在扇ヶ谷川は西北に流れ、若宮大路に至って大路と平行に流路を変えているが、これも若宮大路を造営した際の流路変更の可能性がある。

⑧ なお、義朝以前の源氏の葬地であったことを位置選定の理由とする興味深い示唆もある。野口実「頼朝以前の鎌倉」古代文化四五　一九九三　二七頁。

⑨ 一章④四三頁。

⑩ 鎌倉内の谷と谷を結ぶ道については文献に登場しないが、斎木秀雄氏は台山藤源治遺跡の発掘で検出された山道は山ノ内から台峯を越えて山崎方面へ抜ける（互いに鎌倉外だが）谷と谷を結ぶ通路であるとする。（a「裏小路・山道」一章③a）また、河野真知郎氏も谷の奥を登りつめる間道の存在を指摘する。扇ヶ谷の海蔵寺の谷の奥には尾根を切り下げた通称「大堀切」があり、これを通ると瓜ヶ谷に抜けられたという例もあり、古老らによる鎌倉を囲む山の尾根には「昔から使っていた」小道が多いという（一章③f一八、二六一頁）。

⑪ 石井進「大路・小路・辻子・辻」一章③a七一頁。

⑫ 二章②a二九七頁。

⑬ 一章⑤b七頁。

⑭ 「辻子について」史学雑誌三九ノ四　一九二八。

⑮ 高橋康夫「辻子　その発生と展開」『京都中世都市史研究』思文閣出版一九八三。足利健亮「道路名称としての「辻子」考証」『中近世都市の歴史地理』地人書房一九八四。以下本稿の引用は全てここからである。

⑯ 宇津宮辻子は、『吾』嘉禄元年（一二二五）十月十九日条「小路宇津宮辻子。東西之間何方可被用哉之事。」とあり、宇津宮辻子は小路で東西に走っていたと解釈される。宇津宮辻子幕府はほぼ図4の地に比定されるので、宇津宮辻子は少なくとも横大路と大町大路にあったことがわかる。田楽辻子は『吾』嘉禄三年（一二二七）一月二日条に「戌刻田楽辻子東西一町余焼亡。」、正嘉元年（一二五七）十一月二十二日条に「若宮大路焼失。藤次郎左衛門入道家失火。花山院新中納言。（中略）前縫殿頭文元等悉以災。至田楽辻子火止。」とある。花山院通雅邸は他の『吾』の記載より御所の近辺にあったことが知られるので、田楽辻子は東西に通じた一町以上の道で、若宮大路の東にあったといえる。なお、『市史』は『相良家文書』正応三年（一二九〇）五月八日条より現釈迦堂ヶ谷の入口付近を滑川に平行して東西に通じる小道を田楽辻子とするが（二章②a二九八頁）、これは一二五七年から一二九〇年の間に田楽辻子が延長したものとみた方が自然であろう。大学辻子と咒師勾当辻子は、『吾』弘長三年（一二六三）十二月十日条「若宮大路焼亡。始自咒師勾当辻。至于大学辻子。火炎延。」と『北条九代記』の記載（二章②a二九九頁）より、両辻子とも若宮大路の横道で互いに接近しかつ宇津宮辻子より北にあったことが推察される。

⑰ 河野氏も北条時房・顕時邸址遺跡の発掘結果より、「屋地内をどう分割して使うかは占有者の事情によったらしい。」と述べる。一章③f四八頁。

⑱ 前掲⑩a

⑲ 一章③f二九、三〇頁。

⑳ 一章④二二頁。

㉑ また、野口実氏は「鎌倉はすでに義朝以前の段階で、一定のプランに基づく『都市』として成立していたと考えでもよいのではないだろ

うか。」（二章⑧二七頁）というが、プランに関しても本稿ではその存在を否定した。

㉒　一章④三〇頁。

四　おわりに

本稿では、中世都市鎌倉に関する先行研究の再検討を通じ、歴史地理学的に空間構造を考察してきた。鎌倉は中世前半を通じ、政治的・経済的・社会的・文化的な様々な要因により変容し続けた都市であった。しかし、本稿では未だ説明できず残った疑問がある。それは、鎌倉に古代都城的な都市プランがないとはいえるが、では別の形での都市計画は存在しないのかという疑問である。本稿で明らかにした第Ⅱ期の鎌倉を、頼朝はどのような構想の中に位置づけていたのであろうか。またそこから、都市史という観点に立ったとき鎌倉はどのように位置づけられるのかという疑問も生じる。古代都城的都市計画は自然を改変してまでも実行されるのに対し、鎌倉は頼朝入府以前の自然に即した拠点的な集落が拡大していったものといえる。都市の発展に伴う開発は、主に谷の拡大と切通しの開削であったが、それもむしろ実態の追認的なものであろう。街路の形成も同じく人々の生活ないし事実上経済の必要から生じたものであろう。こういった都市形態は中世都市の類型の一つであるといえるのであろうか。古代都市から中世都市への過渡期ととらえればよいのか。それとも鎌倉は形態が地形上の制約から規定された、他とは比較できない個性的な都市としてしかみせないのか。

この疑問に関しては、松山宏氏[①]が考察を加えている。松山氏は戦国城下につながる都市の系譜の一つとして鎌倉をモデルとした守護所から守護城下、そして戦国城下へという「小鎌倉」ともいえる流れがあり、鎌倉は中世政治都市の源流であるとする。鎌倉の位置づけとしてこの説が妥当か否かは、日本の中世都市研究全体をふまえないと判断できず、慎重に見極める必要がある。今後、他の都市との比較を通じ、さらに中世都市の歴史地理学的考察を進めていく予定である。

（京都大学大学院文学研究科修士課程）

① 松山宏『武者の府　鎌倉』柳原書店一九七六　二〜一九頁。

The Urban Spatial Structure of Medieval Kamakura

by

YAMAMURA Aki

Medieval Kamakura was situated in a small valley. Claims that the city was developed on a grid pattern, reminiscent of Heian-kyo, are groundless. Prior to the establishment of the Kamakura government, dwellings were located along the east-west road and at the foot of surrounding hills ('yatsu'). Minamoto Yoritomo, in 1180, built official structures along the east-west road and in addition, constructed a north-south street in the center of the valley, which did not, however, function for a few decades. As the political situation evolved, most government buildings concentrated on the north-south street, which become the main axis of Kamakura. Once this road was developed, and urbanization progressed, narrow paths connected these major streets ('zushi'). Many of these paths ultimately became lined with houses.

Tang Bureaucratic Appointments and the Board of Civil Affairs's Shifting Function

by

MATSUURA Norihiro

During the Tang dynasty, the appointment of civil servants was controlled by the Board of Civil Affairs (吏部). From the latter eighth century, however, the administrative prerogatives of the Board of Civil Affairs shifted to the Secretariat-Chancellory (中書門下) for central national appointments, and to the provincial government (藩鎮) for local appointments. Nevertheless, when analyzing the role of the Board of Civil Affairs in the late Tang, the Five Dynasties and the Song periods, it is clear that the board continued to function as both an archive and an investigative agency of civil servant candidates throughout the Tang dynasty.